

148

187

菅原智洞師述

必讀 教家 說教 集錄

言々海
同文選

京都書林

佛教書院發兌

勸化言々海序

能州智洞師は唱導に名あり。去し冬長安の

相見て。精言時を遷す中。余教化の要道

は。師修人曰く教化之道無他唯在遣人得菩

提也。欲得其菩提者先生信心欲生其信心者先觀

無常觀而後能得矣。教之爲要なんど説

來れ。辯舌極道至理なれば。余も感に堪し

先無常を觀せよとの一節。書記し

てと請けよ。いかにと諾しつゝ此一篇を瀝

々と書下して。曰此編也。雖莊嚴菩提之一事。皆是

以國話而只如豆婢之一策耳。來者電囑其爲笑倒



亦我知之。として筆を投して自ら打咲て與られ侍
る。余嬉くして懐にし歸來て。熟く之を讀み文に句
に妙絶言へきなれば。後世の我輩の爲に。既に
梓に銘して世に行はんことを欲す。尙また信心
菩提の言語も時あらは授て梓行せん。爾し佛の
心地を傾け大千の界を一筋の毛孔に取納れ。聖
の智慧を合て萬人の心を方寸の胸中に吞込む
人の爲には非ずあなかしこ。寛延庚午春周州小
鯖嶽釋春國芳瑞謹識

言々海自序

古人所謂。言々語々者。則何哉。惟之道也。已多有言
而不言々。語而不語々者。不覺人命。日夜去也。否哉。
不否矣。爲之言斯道。語斯道。從後來。或從此去。亦唯
貞者一者也。故名以海言然。寛延己巳仲冬菅原山
僧智洞如達書于平安城西大五堂與之

芳 瑞 師

勸化文選序

往し己己の冬。達師より索得て梓行せし言々海
 ずてに大方に流布すること六年。その益や鮮か
 らず。是故にその嗣著あらんことを願ふ。則ち編
 成て貽らる。因て以て梓に上しぬ。達師の此業に
 於るや嫂溺るゝに手を以るの願にして。止こと
 と得ざる所あるものなり。文の質に勝を以て後
 言することなけれ。その文々句々や皆古人の名
 言。これを選集して編をなすときは。これこの文
 選と名くる所以なるらめ云爾り。

平安西山春國題

説教集録(勸化言々海)目録

- 第一〇 いろいろにはへとの言附臨終を大悔ふ諭ふ……………一頁
- 第二〇 艸枕只假初ふの言附光明を懐に諭ふ、願力を地震に諭ふ……………三頁
- 第三〇 徒に過る月日の言附養老の瀧水を語る、極樂莊嚴淨を辨と六頁
- 第四〇 紅花の春の朝の言附八頭八々角鬼を語す、地獄苦患體の辨……………八頁
- 第五〇 夢かどよ闇の現の言附白木の合子其儘、櫻見の哥を法に合……………九頁
- 第六〇 往事渺茫の言附難行戒の舟を語、弘誓の舟儀の辨……………十二頁
- 第七〇 祇園精舎の言附迷を桶伏ふ諭ふ、破れたる縵絶の辨……………十四頁
- 第八〇 夕暮の物を悲の言附嗜て見ての諺……………十七頁
- 第九〇 古墓何代人の言附尼ふ笄の諺……………十八頁
- 第十〇 紅粉翠黛の言附名号の靈藥を語す……………二十頁
- 第十一〇 北山何を累々の言附巻て疊て納ての言……………廿一頁
- 第十二〇 筋骸本無實の言附京四條納涼の事、彌陀願心深厚の辨……………廿五頁

第十三〇 情々世間轉變の言附浮世放蕩子の事……………廿八頁

第十四〇 布装 樹華の言附雜行を甲ふ喩ふ、千秋万歳樂の辨……………三十頁

第十五〇 宛轉たる娥眉の言附雜修を鏡に喩ふ、極樂の湊入りの辨……………卅二頁

第十六〇 世間何物その言附竹林寺に嘯しを語……………卅四頁

第十七〇 有生必有死の言附首陽山に餓し事、宿善を春に喩辨……………卅五頁

第十八〇 初中後年の言附祖父は山に柴刈に、大黒殿の丸頭巾……………卅七頁

第十九〇 昔爲三万乗君一の言附天空の満月を語、雪佛の莊嚴の辨……………卅九頁

第二十〇 羅上朝露の言附焔王の白洲を語……………四十五頁

第二一〇 天地は万物の言附煩惱を城ふ喩語……………四十九頁

第二二〇 去者日以疎くの言附跡の野となれを語、日本一治一亂の辨五十二頁

第二三〇 屠所之羊の言附冥途を王なし……………五十六頁

第二四〇 在夢那知夢の言附紅葉踏わけを語、極樂の新宅の辨……………五十八頁

第二五〇 本无今有の言附費長房を語……………六十頁

(勸化言々海目次終)

第廿六〇 溢然 長往の言附太公望を語、報佛恩の稱名……………六十二頁

第廿七〇 把鏡照面の言附光る物を鏡に譬、妄念の雲雪の辨……………六十七頁

第廿八〇 年々歳々の言附香る物を鏡に譬、柳は綠花は紅の辨……………六十八頁

第廿九〇 孔子在二川上の言附流る物を矩に譬、三界六道は郭の辨……………七十一頁

第三十〇 白髮三千丈の言附降る物を矩に譬……………七十二頁

說教集錄(言々海後編)目次

第一〇 貧富段附設ても足らざる言、灸治の譬喩……………七十五頁

第二〇 短夜段附裸人形の譬、時雨の譬喩……………七十九頁

第三〇 文車段附手習子の言、風來宿の譬喩、振袖の言……………八十一頁

第四〇 風雨段附猫の首玉の言、竹馬の言……………八十四頁

第五〇 學文段附襟元厚さの言、不孝者の言……………八十八頁

第六〇 雜修段附破煙管の譬喩、糞食の言……………九十頁

説教集録目録終

- 第七〇家造段附等活地獄の火言、心の所縁對鏡……………九十四頁
- 第八〇歸字段附仲人噂の言、前車の覆る後車の戒しめ……………九十八頁
- 第九〇細素段附堂椽頭の言、釜の火の言……………百二頁
- 第十〇山高段附鼻紙の果の言……………百五頁
- 第十一〇家猫段附盜僧物の言、寒暑の言……………百七頁
- 第十二〇朝夕段附鄰の糞杖味噌の言、蓮華の言……………百十二頁
- 第十三〇養狗段付雞八聲の言、商は利分の爲め、足摺の言……………百十三頁
- 第十四〇謀計段付神正直者の頭に止る、呂望の釣針、瓔珞の言……………百十七頁
- 第十五〇蟻行段付大鷗の翼九万里、行合舟の言、楊枝ぶ畫繪弘誓の渡海の言百廿頁
- 第十六〇剋已段付金剋木言老後樂み富を飽さる言、茶數奇言、良藥苦の言百廿二頁
- 第十七〇臨命段付明言録の言、名殘惜言、虛口辯の言、定業の言……………百廿六頁

説教集録 (勸化言々海)

第一席

釋智洞述

いろはにはへどつらなるやむまよふ常 諸行無常の春の華は是生滅法の風ふ散り。生滅己の秋の月は
 色難く青散りて紅散りて 常 諸行無常の春の華は是生滅法の風ふ散り。生滅己の秋の月は
 寂滅爲樂の雲に隠る。 娑婆のこれ假の宿り。一生はたゞ夢の戯れ。流水生涯盡き浮雲世事
 空に任律 何處と今日問は谷吹嵐峰の松風 一休 花の下月の前に言を交し芝蘭の
 詩 消。翠の帳錦の茵に枕を並し比翼の語ひも。徒らに東岱の煙と
 昇る。眞の海か枝を轉るも。生死無常の初音なり。郭公の雲井に名乗も。有爲轉變の
 響をかくじ。上は地境の樹尊たふ。無常の風に誘れ玉ひけれ。下の五逆の罪人も。一度は
 野邊の塵となくなる。かしも名たかき兵の一回墮れは髪は。甲を貫く程の勢ありし樂噲か
 骸も焼は則ち灰となり。音に聞えし美夫人の。雲の 髪花は顔。大液の芙蓉の紅。未央の
 柳の縁も是に争て勝るへさど躡られたる。楊貴妃か姿も埋はまた土となる。狄にそたく
 蚤水に鳴く蛙。争か生死を遁るへさ。花の中の驚また秋の蟬の吟の聲。何れか無常を免

れん。昨夜生れし赤子の。今朝死せる化に墓なき世の分野あさきゆめみし如くなり。臆目も他も斯る世の例目の前に溢れ。最も脆き命を持ち去どの危き此身なれば。急ても急くへさの後生の一大事。頼ても尚深く頼むへきは彌陀如來なり。いかに財寶か多ければとて。閻魔王もは賂かならぬと。假令天地に充滿る金銀にても買れぬものは命なれば。此世のどの兎も角も。未來の用意はせねはならぬとよと。母の胎内を分て出しより已來。今に至るまで善根なしたる覺かあるか。功德つみし例かあるか。ほんふ鳥の鳴ぬ日はあるとも。惡趣の種を造らぬ日とてもなく。一人一日中八億四千念。朝より晩まで思ふも言ふも地獄の因。巧むも語るも三塗の業。煩惱の借米の地獄道にも夥どあり。罪障の借金は畜生道にも多くある。頓て無常の節季か近寄り。追付け臨終の大晦日になりなは。數多の獄卒鐵棒をつき。業の債布に報の帳面肩あかけ。西の妻戸に物申を乞も。餓鬼道より食欲の懇請。東の窓より指出とも。修羅道より瞋恚の書出。北より取に向ふも罪の拂。南より責に來るも障の買掛り。最早三途の引負も化か顯れ。彼地も算用せんにも。此地の差引埒明んふも善根の米は半合なし。功德の銀を一厘持はせと。相談の方便もなく談合の手も盡ぬ。晨是

からは閻魔王の御仕任せ。五尺の骸を分散お逢か。但は三惡の牢屋を押込らるゝか。またの三塗の河原で獄門にあけらるゝか。死出の山路で架あかゝるか。八熱地獄の火灸か。無間地獄の釜煎かどうて。善方を行はすまし。冥途の奉行に縁者は持す。地獄の役人に親類はなし。誰か最負をしてくれん。偕も悲き身の上と畏るゝ心か有ならば。彌陀を頼め愁る氣かつきな。極樂を願ふ如來の子分になりぬれ。三惡道より負米を責ふも得來らと極樂の家主と定りぬれば。閻魔王も手を指とことか叶ぬ程。老の嵐の身も染々と。白髮の雪のつもるにつけても。娑婆苦患の冬籠も。最暫の間たふして。極樂往生の春は次第お近付けは。七寶樹林に咲ける花盛を。瑠璃の欄干に倚て詠るも追付けなり。白鶴孔雀の轉る初音を。黄金の林も游て聞くも頓ての内なり。おな婦や南無阿彌陀佛く。

第二席

玉葉 集 どの古人の詠哥。生之々々々 輪轉ス 帥枕た 假初に迷出て哀れ幾世の旅寢しつらん 六趣の死去々々 沈淪 三塗の生我父母 不知 生之由來 受生我身亦不悟 死之所去 願 過去冥々 不見 其首 臨 未來 漢々 不尋 其尾 とは二教

論の言。それ十二因縁の流轉の車の庭を回るか如く。鳥の林をめぐふに似たり。前生また前生の習て生々の先を知らず。來世なを來世。更に世々の終を辨ることなし。或時は人中天上の善果を受といへども。顛倒迷謬していまた解脱の因を植す。亦或時は三塗八難の惡趣に墮して。患に障られて既に發心の媒を失ふ。爾るに吾等適々受難さ人身を受たりといへども。罪業ふかき身と生れ。そよと元朝五更のあかつきより。節分除夜の大三十日に至るまで。是そ一日菩提の爲とて。吾屋をいて人倫たへし山あ入り。人里遠き洞あかくれて。善根功德を修行したる例もなく。惜かやめは貪かおこり。昨日も地獄の因持。今日も無間の下穢。目に見ては執著を起し。身に觸ては貪愛を催し。舌も味ひ耳も聞鼻にかき心お思ふこと。皆悉く三惡道の業因はかりを植貯る。姿人あ似たれども。心の内は夜叉羅刹の如く。額に角の生ねてこそあれ。胸の下は鬼よりも強ひ。背かに鱗の逆立ぬてこそあれ。大地よりも怖き根性。必定無間は吾栖か。假令天の崩れ地は崩るども。佛あなると云ふことのはね吾等なれども。忝や彌陀他力の本願に助け玉へと。頼奉れは。其儘不退の心地にのほり。光明の懷の中あ拘込れ。攝取の蒲團に大悲の手枕ら。弘誓の衣服

暖かに。心光照護の益に預り。何日何時露の命の消るども。一息閉限の夕あは。易くと極樂淨土の花雨臺あ往生を遂るに更に疑のなきは信心の行者なり。此信全く行者の自ら發起する所ああらと。偏に願力の不思議よりなさしめ玉ふ。願力の不思議と。思ひはかられぬ本願の力なり。愚かお思ふは世の中あ。地震ほど思議られぬ力を持たものはあるまし。金剛左衛門。力士兵衛の兄弟に。五十余人ああり。綴太郎には八十人ああり。曾我の五郎や朝比奈などには八十五人ああり。辨慶あは千人ああり。金平には敵一倍。楚の項羽あは八万人ああり。世に力の強き者も多けれど。縱焚槍か勇にても。山ひとつ動かさることならぬ。爾るあ地震に何程の力を持て居るやらん。國中を一度あ動かさ。偕も不思議な者と。今日の自他も無始より已來。十惡五逆に煉堅めたる煩惱の大地。普賢菩薩の十人ああり。藥師如來の十二人ああり。釋迦の五百人ああり。震然ともせず。引けと拵れと千曳の石。諸佛慈悲の腕頭て。動かされぬ煩惱なれども。彌陀には何程の御力ああるやらん。奈何なる者も宿善の地震に動かされ。嬉しや南無阿彌陀佛と。搖き出て。悦いねはならぬ容になりし。偏あ大願業力の不思議に極る。

第三席

徒らふ過にしことや歎かれん受かたき身の夕暮の空」とは慈圓僧止の讀捨。時遷質改
百年齡漸闌。春去秋來三塗郷己近。とは解脫房の操言。寔や月日に關守居され
は。三羽の鉦箭を謝るより早く。昨日今日と過行儘に。何の間みかは覺す知と。年老の積
れども。淺増ひかな後生の用意は露程もせと。作りと作る煩惱の。須彌山よりも遙かに高
く。憶ひと憶ふ妄念の。滄溟海よりも尚深けれど。曾て慚愧の心もなく。眼に遮る生死無
常を見ても。更お驚く色もなし。朝に紅顔有て世路も樂むといはとも。夕には白骨と成て
郊原に朽ぬ。有爲の分野無常の誠。誰か必滅の理りを遁るへき。昨日まで人の死を吊し身
の。今日は早鳥邊野の煙と登り。化野の露と消行世の習なれとも。夫を夫とも思はと。若
きを頼にして後生を願はと。達者なを宛ふして出離を求すん。寔に鳥の雲宛目とやらん
木石よりも尚劣たる心底。人の皮を着たる畜生といふる本文。何の争ふ所かあらん。實夫
逆も五十年とか。又は七十年とか。決して生る定おらは去來知らす。老少不定と聞時は。
出る息は入るを待ぬか。娑婆の分野。假令市も交り岩に隠れ。石の唐櫃に身を潜ても。遁

れ難さの無常の利鬼。既に天上天下唯我獨尊と。名出玉し釋尊たに。八十の春の比頭北
面西右脇に臥し。拔提の浪と消玉ふ。何に況や凡夫をや。吞心よりいつしかに傾て老をも
忘水の朝居の床も起愛からと。夜の寢覺も淋からと。勇心の増水の。絶とも老を養ふと。
讀たる養老の瀧水を。水風炉にしてのまつて居ても。定業計の免れぬ。いかに彭祖か菊の
水。滴露の養ふ仙徳を受しより七百歳を経たれば逆。名耳殘て跡方もなく。今にも無常
の風に誘はれて。臨終此世彼世の際に迫り。黒鬼赤鬼の獄卒に引立られて。死出の山三塗
の川に赴時は。兼て頼置つる妻子も財寶も。吾身に添者逆の一つもなし。死して行身は
後生計か一大事。息才な間も彌陀頼め。達者な内に他力を信せよ。他に旗は指れぬと。外
て器は擧られぬと。杖とも柱とも頼へさの彌陀如來計なれば。自力の扱を離れ一心の領解
に落著ぬれば。いつ命は終とも其盤浄土に往詣を遂奉り。住居の見も馴れぬ。百寶の樓
閣凡凡の豐碼碯を連ね。鴛鴦の瓦金銀を並。瑠璃の大地も軒磔の礎。紫金の柱に玻璃の貫
珊瑚の橋も琥珀の梁。眞珠の軒端に摩尼の彫物。入替取替莊立。莊嚴美々しき宮殿も起伏
し。六根六職みなうから。樂直の御馳走も預り奉るに疑なきの他力の信者。

第四席

紅花の春の朝。紅錦繡の山粧をなすと見しも。夕の風に誘われ。紅葉の秋の夕。黄纒縹の林色を含むといはれども。朝の霜が寫とかや。風葉の身持ち難く。艸露の命消易ければ。少年が頼むもあらざ。息才な宛もならざ。世の中は只假初の艸枕むとふともなき夢とことみれ。續千電光石火水の泡。偕も墓なき人界の分野。今日とも知らず明日とも知らず後れ先達つ人の本の滯。末の露よりも繁しとさくときは。移れば替る世の習。松風羅月に言を通と賓客も去て來ることなし。翠帳紅閣の枕を並し妹背も。何の間ふか隔つらん。凡そ心なき艸木。情ある人倫いつれ無常を通るへき。自も他も速か遅の替すあれ。逆も死去此身なれども。斯とい思知りなから。六塵の境に迷ひ六根の罪を造り。或時は色小染み貪着の思淺からず。又或時の聲を聞愛執の心最深く。去年も今年も跡月も此月も。昨日も今日も作爲は地獄の因。口に言ことも語ことも心に思ことも。巧ことも身も爲ことも營ことも。皆悉三塗の業。行々歩々足の下に無間の猛火を踏居れども。替て畏ると思もなく。念々時々無常の利鬼か後より追詰來れども。更に驚く氣色もなく。有ぬ思に煩惱の

第五席

重ねれど。未來の貯は爪の上の土はともなき程ふ。臨終今端の時になり。因果は回る火の車の迎に預り。八頭入る角入る眼の獄卒に引立られ。悪趣の道に赴かは右も左も劔の山。前も後も亦の林。漫々たる三瀬川ふは。浮ふ便の舟橋を渡てくれる者もなく。渺々たる廣野には誰伴ふ人もなし。唯聞の者の阿房羅刹の責の音。幢として天も顛るはと鳴渡り。罪人の呼聲は吸として。大地も崩るゝ計に響き。あら怖や悲やな至盡せの焦湯熾炭。行著ぬれの研刺磨擣。八寒地獄の鐵城には。紅蓮の氷凜と互。阿鼻地獄の石門には。焦熱の炎煌々と燃上り。赤眼紫角の怖さ鬼。罪人を抓て釜の中へ投込は。銅の湯玉霏々然と飛上る斯る。呵責に逢段に及ては。縦血の涙を流し。天を仰ぎ地を叩て悔とも跡は賑らし。

夢かど上閣の現の宇津の山月にもたどる葛の細道家。昔は松風羅月に言を通し。翠帳紅閣に枕を並へ。襟々なりし情の末。花も紅葉も散々に。朝の雪夕の雨とふることも。今の身も夢も現も幻も共に無常の世の分野。昇野邊之煙在今乎在明乎。伴北庭

之苦待晨哉待暮哉愚迷發。自も他斯る。墓無き權の。日影待間の露の身を。今日今時まで存ぬ。逢難き彌陀の本願に逢ひ。聞難き他方圓頓の法を。縦も聞るゝこと。生生の大慶世々の満足何事か是に如ん。永の面も照る月波を。負れば今宵と秋の最中なりけり。願佛法繁昌の辰中と云は惟今とかし。春宵一刻値千金。花に清香月影。實千金も替しとは今此時かやと。田村にも話し如く。今日見すは悔しからまし花盛り。咲も残らと散も初めと。都鄙圓満の雲の下。四海八嶋の外までも。蔓らせられたる彌陀の本願。東の奥州西は鎮西。山林園巻に至るまで。道場佛閣のなき處もなく。鐘の響太鼓の音も賑かに。時々説法の聲絶と。方便法身の尊形。柴の編戸垣生の小屋の内まで。御免下され十方八方より。大慈大悲の網を張の。頼よ信せよと勸玉ふ所も若や若。無宿善の機や有て。是を信せと行せととして。徒らに地獄の舊里を歸ふなれば。寶の山に入て手を空とるの本文。さりとは殘念なる仕合せ。今煩惱の繩に縛られたる罪人。斯る本願を頼ますんは。いつしか出離の期あらん。輪回の鎖に繋かれし女人。此の弘誓に縋らそんは。また何れの時あか婆婆を出ん。疾速かに決定まうしたき。他方の信なり。此の信を決定するには。誓て陳まし

き作法もなく。更に嚴き法度もなし。唯何の容もなく頼み参らるる計なりとの御勸化なれば。一點毫末も自力の計ひを加ふと。願も行も功德も善根も。淨土参りの入用の分。皆悉く如來の方に御成就なれば。添そ加そ足と交るす。山賤の白木の合子そのまゝに。漆つけねは元色もなし。生質のむくの儘染と畫かす彩もす銚らと。柳は翠花の紅ひ此身此心て有乍ら。一期の間たに唯一度。助けたまへと御約束まうした計りて。易々と西方極樂の臺の上。迎取ぬとならば正覺は取らしの大願なり。爾し此理を誰も聞さるにはあらねども。良きそれの忘念の起る心たしるき。三業を身繕して。自力に立戻らんとする族あり。あゝ殘多やな「櫻雨雨の降り來ぬ同じくは濡とも花の蔭ふかくれん」朗詠。花見にゆき雨も値て。毛氈を破り筵括着て。逃走るはさりとして見苦きものなり。迎も花見に來たからば。假令ぬるゝとも花の蔭にかくれて。濡ながら花を詠んとよみたるこそ風流なる心操なれ。自力の行者本願の花見に來なから。煩惱罪障の雨かふればとて。雜行の毛氈を被り雜修の蕙など着て。三業を身繕ひして逃走るは。さりとして殘念なる仕合せなり。迎も彌陀大悲の花見に來りし我々なれ。假令貪欲の雨はふるとも。曠蕪の風はふくとも。一心

一向に佛智佛願の花をなからめ。更み餘の方の心をふらす。唯他方の花の蔭お立休らひ。煩惱の雨にぬれなから。御慈悲の花を詠めよとの御勸化なり。「託ぬれは今將をなしなにはなる同名と云ふ。身を盡ても。標榜の難波へ逢んとと思ふ」。逆も淫名の立からは同名の立るてに。身を盡し命を捨てたりとも逢んと讀たる如く。ぬれぬ前こそ露をも厭ぬ。逆も他方を頼むと云ふ名の立たるから。身を盡し命を捨てたりとも。阿彌陀如來に逢奉りたきものなりかし。

第六席

往事渺茫都似夢。舊游零落半歸泉。香山。とかや月日の駒の足早く。鉦矢を射掛し如くにて。年月積るの夢現。去年の昨日や今日までも。参詣恭敬に肩を並へ。上參下向ふ手を携たる同行も。今は土水の藻屑塵芥。一柱の率都婆の主となり。塚の印にひとさの松。感時花濕淚。恨別鳥驚心。と杜子美か悲み。人往我殘。是爲有爲。不有矣。體去名留。彼夢歎非夢。歎と解脫房の嘆。昨日見し人はと問は今日ひなし。吾身も明日の人に問はれん。思ふは頼み少き世の中や。不定の境と聞ときは。富貴も

貧賤も共に是れ浮へる雲。雲上の花の蕊春の朝の御游ふ馴れ。仙洞の紅葉の秋の夜は。月に戯れ色香に染み。花やかなりし身の上も。衰ぬれの槿の日影待間の分野なり。春見花色一知。世間生滅。秋聞風音。一觀吾身。無常とは大論の本文。寔み心ある人への華に寄る月お准ても無常を思知り。又暑さにつけ寒さにつけ。後生は願はひて叶はぬ筈なれども。淺増や今日の面への。責て薄の露はとも。未來の種を植へせて。夜に日に積る罪咎は。柳や舟にも車にも。ほんに積ることおわらそ。爾るを整ふ難行の小舟にのりて。生死海を渡んとせば。智解了脱の棹も。自力に定惠の櫂も。面への働き次第と勵むとも。法理は高く根機は卑し。罪業の浪風は暴高け。功德の舟は輕ければ小善の楫も折れ微功の錠も失ひ。最早助からん方便なく。無有生死出離之縁と迷の水底お沈み。苦海の藻屑となりはつへきを。頼母敷やな彌陀弘誓の大船。斯る者の爲に棹寄せ玉ひしなれば。いかなる煩惱の重荷はありとも。御助候えと打乗はかり。櫂楫は他方の御計ひ。布施波羅蜜の楫を立て。持戒の艦楯に忍辱の械。精進の纜禪定の錠。智惠の桅に慈悲の帆を揚か。若不生者の追手の風に吹とよかせて。生死の海原を漕行時は。いかに罪業の波高く。煩惱の汝

の満ちかあれいとて。危きことは少しもなく瞬一つせぬ間に。つる易く極樂の湊入を遂るに疑となき。

第七席

祇園精舎の鐘の音は。諸行無常の響あり。沙羅双樹の花の色。盛者必衰の理を著はす。奢れる者久しからず。只春の夜の夢の如し。猛き人も遂に亡ひぬ。偏に風の前の塵に同じ。平家とかや一天の君も萬乗の主も。免れかたき無常の道。假令富貴の春を迎え。思の儘に榮花のはなを開きし人も。頓て無常の秋風ふ吹かれ。命ち落葉の叢に捨られ。金鷄障の中に養はれて綺羅を飾り。瓊玉窓の下に冊かれて。窈窕の貌を瑩し美人も。魂去ぬれば遠く送る。實淺増くもまた無頼き世の習ひ。人を焼し葬坊も終には煙と昇り。託られし石塔屋も。己か名も果は五輪に残す。逢た夜の懺か。曉の涙と變すれ。昨日露うちし客の今日吞あらしの酒雫を貰ふ定なき命は。石の火て煙吹ふ内。蝸虫の壁に角文字かくまもあらず。高貴卑賤もかわらず。宮も薫屋も果しなれば。玉の臺も何にかわせん。錦の茵も争か頼まん。假令盛にして衰ることなく。千歳の定命中天なくとも。佛果の期し極樂の

願ふへきに。況や有爲無常にして盛衰甚し。情往事を思ふに盡くこれ夢に違はと。悦ふも歎くも共に儚りなれども。歎くは多く悦ふは少し。盛なるも衰るも皆幻なれども。盛なるは甚た稀あして。衰るは頗る數多なり。陋巷に苦むるもの影しけれども。顔家の樂を思ふもの尤絶ゆ。敝れたる温袍は著れども。子路か志しあるものは替てなし。舜何人ぞ自何人ぞ。姿を顧れば愚癡盲昧の艸臥者。形を尋ふれば破戒無戒の途方なし。三世の如来には五障三從の膺扱けかなと浮名を立られ。十方の薩埵に。十惡五逆の鼻垂とと評判を付られ。東西南北の淨土よりは。門戸を閉て追出さる。四維上下の寶刹に。臘を切て寄付け玉はす。過去の諸佛の異見にも迦れ。現在の釋迦の教訓にも漏れば。最早立寄る門もなく。頼とすへき人もなし。纒か持たる善根の銀子は。生死の郭に蒔散らし。少し残し功德の鳥目も。迷の里てつかひ捨て。地獄筋の揚屋にも。罪の拂ひが餘程重り。畜生邊の茶坊にも障の掛りか夥とある。少善の印籠を賣拂ても。微功の羽織を質に入れても。中々埒の明くことてなし。彼邊に無心云はんも。此邊に合力たのまんにも。誰れ愛見とる者もなく。畢竟迷の里の桶伏に逢ふは勿論。結句の果は悲くも。曾無一善の影身に。

煩惱の葉薦をかけ。罪の破れ編笠に。報の欠御器一つをもち。三界の巷々に寒む。六道の辻に立て。乞食より外に仕方のなき悪人なれども。一念彌陀ふ歸命すれば。其儘正定の位を免され。即時に善根の祿を賜り。煩惱の葉薦のひさかへにて万善の衣服となり。罪障の破笠もいつのまにか万行の寶冠とかはり。身を顧れば圓滿自在の大福長者。姿を尋ぬれば恒沙功德の俄か分限者。地獄の借金もなしすまじ。畜生の負米も拂て仕舞。最今程はこゝろに懸る事の葉もなく。たゞ往生の時刻をまつばかり。極樂の日に近くとなりける哀れうれしき老のくれかな。日々夜々に遠かるの苦き浮世。時々刻々ふ近づくの樂き淨土頓ての内自他も。莊嚴美々しき御國お主り。彌陀如來の御待設の御膝下る近く寄て。五劫永劫の御苦勞の御禮も。染々と御目にかゝりて申上んものを。うれしや南無阿彌陀佛とよるこふより外に所作のあらし。爾れば面々疾本願に逢ふことを悦び。一向ふ他力を仰くへし。水の上の泡より墓なき命を指ちなから。朝夕五欲の霧に迷ひて。いかくしからぬ淨世の橋を渡り兼ねて。且暮心をいためつゝ徒らふ年月を送らんより。急き不退の樂果を得んと。本願招喚の詔りにしたかゝかし。憂きことの重なる身こそうれしけれ。左有ての争

て世をは厭はん。憂事のあるな縁にして娑婆を厭ひ。佛智の普益を信して。一念歸命の其時に。往生の一定なりと落居して。生らの念佛申しなん。死なひ淨土を慕りなん。生ても死しても頼もしき吾身の上と。安堵して喜ぶのみとかし。

第八席

夕暮の物を悲き鐘の音を明日も聞へき身とし知ねは」とは和泉式部の詠哥。實も化なる人間界。一日の中にも曙はいつれお心の潔く。夕暮は何となく物悲きに。入相の鐘の音を聴き。今日も早暮果ると思は。彌々壽命の促る程を觀せらる。日は暮てもまた明ると云ことあり。鐘もまた明朝響くへし。究て明日も聞んと期し難きは人の命なり。爾し此理を誰も知ざるふいあらねども。眠て一夜を明しても。娑婆の逗留の一夜滅するとも思は。覺て半日を暮しても。冥途の旅の半日近寄と云ことをも辨は。たゞ曉の鐘を聞ては。閻の別を惜み。斜陽の鐘を聞て契りし人をのみ待て。あらぬ思ひに罪業の造れども。更ふ未來の善種を植ることなし。淺増と云も中々愚かなり。觀身岸類離根艸論命江頭不繫舟と羅維か詩にも賦したる如く。身は浮艸の寄邊なき心の水に誘れて歸らぬ昔を悔み。

來らぬ末を愁ゆ。近き内に捨て去る浮世とは思はれども。身を過き世を渡る營計りに心を移し。頼て生るゝ浄土とは知乍ら。いつ染くも嬉しく喜ぶこともなく。臥して夜明とも三毒の床の上なり。起て日暮とも六欲の窓の内なれば。眼に見耳も聞鼻に嗅舌に味身に觸れ意に巧むこと。皆悉く妄想顛倒の媒にして。勤んと思ふ下よりも願き易き心の猿。息んと思ふ内よりも起るもの。煩惱の村雲。燒野の薇芽を出と如く。ふつと煩惱つくるまじと嗜て見ても無情この惡凡夫ふ何かなるやらん。三世の如來には嫌るゝ。十方の菩薩ふ捨らるゝ。最早聖道の白法も望盡き。自力の修行も及絶たり。決定必定無間地獄に宿札うちし。罪人と云へ在坐の面。我等なれども。茲ふ頼母敷きは彌陀の大悲。法界の衆生一人ゝの爲に成替て。願も調ふた行も揃て置た程に。智眼闇しと悲むな。罪障重しと嘆かされ。罪の重きか本願の得手と。障の深きか他力の勝手と。唯其身其儘なから御助侍ると。頼む計て救ぬとならば。正覺は取らしとの弘誓なり。

第九席

古墓何世人不知三姓與名化為路傍土十年春艸生とは白樂天か語「由や

君昔の玉の床也も斯らん後は何にかわせん。とは西行法師の歌。思ふに轉變不定の娑婆。哀れ胡蝶の一遊ひ。夢の中なる浮世なり。玉の床を磨く雲客も。野邊こそ終の栖なれ。錦の褥を重ねる美人も。夕の煙を形見となる。實無常の殺鬼は時節を定めと。有智高德の君子にも憚らす。智謀武勇の良將をも恐れと。伎藝多能の術にも愛す。仙方不死の神丹も。降霜玄雪の靈藥も。有名無實の虚言にして。影を追ひ風を握るの笑を殘せるはかり。万乗の君も百官の臣も。あやしの田夫樵蘇菜摘水汲に至るまで。何れか無常を免るへき。老少不定の習なれり。若きもまた保ちかたし。艸頭の朝の露。風前の夕の燈よりも尙遙かに危く。假令神仙の妙術を傳ゆ。松の葉を食ひ石の髓を嘗め。或は丹石を寐り雲母を制して是を服し。氣を伏せ情を隠し。欲を省き。心を治め骨を換髓を洗ふとも。誰か百年の形跡を保たんや。烏兔の過ぎ白駒の走る川の逝き。泡の浮ぶ皆是れ化なる分野。東岱前後の煙り立去る日なく。北邙新舊の露乾く時なし。南隣北里皆轉相哭して別離を悲む聲絶遣らす。親子言を交ひし芝蘭の友も。息止りぬれば。遠く送る正く契りを通せし比翼の語ひも。魂去りぬれば寡り悲む。あゝ無常遷流の理りとは云乍ら。餘り無頼き世の分野なるに。

甲斐なきは他自の身の上。しかれば早く願ふへきは後生。急て頼むへきは彌陀の本願。頼むに別に作法もなく。願ふも曾て行義もなし。生質の此身此儘。尼に笄させとは云へす。法師も髻巻けとは云はぬ。鳩の咲々鼠の唧々繕るはす鎊らす。女の桂髪を戴きながら。男の烏帽字を置きながら。雜行捨てて雜修を離れ。自力を遁れ疑心を止め。唯一向に助け玉ふと信すれば。其信心の寶玉を頼む。彌陀光明の藏の裏に納収られ。攝取の戸を立て。不捨の柩を落して。諸佛護念の番人を付けて下さるゝからは。臨終捨命の晩まで。落着て御報謝の營はかりか肝要。

第十席

紅粉翠黛只彩白皮男女嬌樂互抱莫骸身冷魂去是捨荒原一雨濯
 日晒須臾亂壞燒則爲灰笑見昔形埋則亦爲土誰思舊交哉とは蘇
 東坡か詞「末の露本の雫や世の中の後れ先達つ例なるらん」と僧正遍昭の詠。寔や散る
 花は枝に歸らんと。往年は取留めかたぐ。隙の駒足早く。月日の鼠艸の根を食ふ。危ひかな
 人壽空く此世を去りなは。妬の毒蛇に繼はれ。隲の猛き獸お囓れて。生を重ねても浮む期

あらしと思はは。假の世の假の此身を。何しに斯まで捨兼ね侍ると。爾し定なき世を美し
 と云乍ら。四十年にたられてめやすかるへきとは。餘りなる云分とうなりとも。行著き次第
 か善さそうなることをかし。天命を樂みて何をか疑はんと書たるを尤と思侍る。待ねども
 來る見苦敷き形は是非もなし。面影の替らて年の積れかしの願ひ。命たに心に叶ふ者な
 らんと。識し好ひことはなき筈の娑婆の出生しか不祥。これに付けても一日も化ふり暮す
 へからと。急て求むへきは出離の善。片時も由斷なるまじき無常の風なり。實にも世間
 の幻相を觀するに。飛花落葉の風の前に。有爲の轉變を悟り。電光石火の影の裏には。
 生死の去來を見ること。初て驚くへきふいあらねども。餘りあねなき娑婆の分野。手裏の
 金玉籬の櫻。晝は花夜は月。老の杖ども柱ども。頼み育し孫子の先達ち。頭に戴く老の
 霜。額に寄來る年の雛。四海の涙は静なれども。腰に様の弓を張り。息もかよわき菜竹の
 杖に繼て起臥も手自叶はぬ。祖父祖母の跡も残り。儘ならぬ世の倒竹の憂節繁き其中に。
 生死恩愛の別こそ最悲しけれ「見し人は皆露霜と消失ぬさて驚かぬ吾心哉西。斯る頼少き
 世に有て。取驚て未來の糧を包まざる人心を淺増し。先達し孫子不便と思ひな。尙爾増

に他方を仰ぎ。跡に後れし身一つの無頼ふ思ひなほ。尤取詰て彌陀を頼め。芝蘭の契の袂にの。骸をば愁歎の炎に焦せども。紅蓮大紅蓮の永をば終ふ解すことなし。鴛鴦の衾の下には。眼をば慈悲の涙お濕せども。焦熱大焦熱の炎をば終に滋すことなし。妻の後生も夫の菩提も。たゞ頼母しきは南無阿彌陀佛の六字丸。忝くも久遠實成の昔より。阿彌陀如来の大醫王。末世濁惡の病体を考み玉ひ。五劫思惟に脈を窺ひ。永劫修行ふ四十八味の藥艸を調ひ。積功累徳の御製方。選擇攝取の御匙加減有て。機法一體に煉堅させられ。その機能を三部經と云ふ。醫書の中に微細丁寧に記して。龍樹天親、曇鸞、道綽、善導、源信、源空と七代の間九全ふ相承あそひされ。七代目の源空上人より。選擇本願念佛集といへる添状を認めて。吾か本願寺の御先祖親鸞聖人の。御相傳あそはされてより。御代々退轉なく一子相傳の妙藥となり。中興蓮如上人の御代及て。五帖八十通の能書を調ひ玉ひ。淨土眞宗と鑑板を。打て一天四海ふりかりなく御弘め下され。耆婆扁鵲も似藥のこしらはられぬ六字丸なれり。無始よりこのかた病疲たる今日の面々。三世の如来の御療治もつき。十方薩埵の御配濟もかなはぬ。貪欲瞋恚愚癡の三病を受け。從苦入苦從冥入冥と段

々をもくれ。無有生脱出離之縁。と九死一生の罪人も。自力疑心の毒斷して。善知識の御催促の管あて。一期の間たに唯一粒。助け玉ると香込たれり。其の當体お病の根か切れ。追付け極樂淨土る本復し。無量壽の長生を保つに曾て疑のなきり。他力信者の身の上をか

第十一席

北邙何累累々高陵有四五。借問誰家墳。皆云漢世主。とハ文選に載たる古詩「消果し幾世の人の跡ならん空ふ巖巖く雲も霞も」とハ反古の端にも書殘せし古哥。寶融くたる春の朝た。花を芳野の山に見し客も夕の風に散り。凄々たる秋の夜。月を須摩の浦に詠めし人も曉の雲に隠る。櫻梅桃李の懷き香も。幾程なく春の嵐に誘はれ。蘭菊紅葉の盛なる色も。程なふ秋の霜お移さる。何物か常住と思ひ定むべき。去とは頼なき浮世の分野。身を觀すれば岸の額の無根艸。命を論すれば江の頭の捨小舟。今日は存すとらへとも明日を知らず。桃李未華。暴風折幹。蘭菊未吐。嚴霜萎。苗集。性靈。古法師の嘆れしも宜なり。松の千年も終に朽ち。椿の八千代も徒らに枯る。岷嵒の山の奈。西王母か

園の桃。延齡の徳ありと耳にはさげと求るに由なし。憂秋の紅葉に漏る松か枝も。千年を待たせ雪折の聲あり。千秋萬歳と壽く下にも無常の風ハ来るなれば。指急くへきは後生の一大事なり。左ハ去乍ら愚かなる今日の面々。薄俗にして目の前の五欲に耽て。立身出世も夢の中の榮花と云ことを知らず。憂節繁き世の中に。唯吳竹の縁の常なる思をなしつ。由なき名利の索に撃かれて。曾て身の後の菩提の因を植ゑと。昨日も煩惱み身を苦め。今日も妄念お意を惱まし。昨骨爲せしも無間の業。今朝作るも惡趣の因。形ハそれにあらねども。魂は夜叉よりも強ひ罪者。姿は人に似たれども。心は羅刹よりも怖き惡人。假令高原の陸地も運は生し。破たる石ハ再び合ふ例ハありとも。吾等か成佛の縁も。繼も切れ果し徒者を。何なる大悲の御佛やらん。西方の彌陀如來は斯る者の身替に立て。積切累徳の御骨を碎かせられ。十萬億の艸踏分て。四十八願の鎧を着て。法藏となりたり玉ひ。本爲凡夫兼爲聖人。餘の聖人の漏すとも外の智者は殘とも。惡人女人ハかりは取逃すましと。御上一盃阿彌陀と云ふ御正覺と。今日吾等か往生とを賭ふし玉ひて。行者の方には露程も。煩ひ惱み苦勞造作もなく。著て哺て嚙せて吞如く。唯一息にたふ唱足ら

ぬ名號に。万善万行恒沙無數の願も功德も。皆悉く巻て疊て積て綴て封して籠て。是を諸有る衆生の聞かせて。頼ません者を頼まれん者をと。願に誓を添させられ。吾を頼みし程の者若し一人なりとも。極樂の生れ損したる例あらは。皆七寶莊嚴自然化成と。飾立たる極樂淨土も撤て住廻。六十萬億那由他恒河沙由旬の御身も。寸尺く々に切て地獄廻りして衆生に云分を仕す。託言を仕すとある他方の本願をり。

第十一席

筋骸本無實一束芭蕉艸。眷屬偶相依一夕同林鳥。白樂とかや。是や此行も歸も別れては。知るも知らぬも逢坂の關。生者必滅は佛法の御定め。會者定離は如來の御定て。春朝翫花人。夕散北邙之風。秋夕伴月。暁隱東岱之雲。上人假令玉の冠を戴く万乘の君も。石の帶を纏ふ。百官の臣も遁れ難きはこれ無常の理り。まか金のあふみを扣く面白の郎も。翠の簾を撥る紅粧の女も。免れ難きは冥途の道。金銀珠玉に事欠ぬ長者。彼に亭を建て此に樓を構ゆ。遅々たる春の日は。庭の櫻に對して。海棠の匂と野を争ひ。悠々たる秋の夜は。臺の月を友として。銀河の澄るに胸を洗ふ。狐草の

次冬暖かむ。氷蠶の羅夏を知らず。食の山に綱し川に釣せて日毎に味を替ぬ。何一つ
 乏しからぬ大家にも。別離の苦は免るゝこと叶はねは。子は親お後れて悲み。親は子を先
 達て嘆き。妻の夫を失を呼つもあり。夫の妻に別れて愁るもあり。枚と頼みし孫を死
 せて腸を断つ翁もあり。柱と思ひし惣領に離れて血に泣く寡もある。臆儘あらぬ娑婆の分
 野。頼少き浮世の習。比翼連理も質鈍なる間の語ひ。海老同穴も息ある内の契。息止
 ぬれば夫も焼て灰となし。魂去ぬれば妻をも埋て土となす。能く思ふ兄弟夫婦の交りは
 左乍ら舟の乗合の如く。頓ての内に別れくになるそかし。喩へは四條の夕涼。短屋の炎
 天居るへからととは。裏屋背戸屋の蒸くりの更なり。さらくくと奇妙なる殿作も。内に計
 は氣の蒸を助ん爲の御旅出。和光の影をはつとして。三條細手宮川に。夜店赫く行灯は。
 星か螢か西東。南北夜の玉鐙。是や此往も還も白野郎。押な諺な橋の上。巾着の皮唯の皮
 袂の用心火の用心。麒麟か經捷。遂か品玉口お佛をのする梅春。鼻お楷木を立る男。鰻
 の棒焼に舌鼓うつ僕われは。花火線香に噴とる小法師。腫と集る物真似。活と突出す心太
 千差万別夜通ら。群る人は多けれど。夜明て見れば瓜の皮紙屑はかりを所狭く。今も猶そ

の如く。妻よ夫よ親よ子よと。頼もしつとも暫しの内。死去ときり別々を。斯る世の例目
 前お遮り。耳に盈れば眞に。生死を離んと思はん人は。菩提の山に入る路のはたしを捨て
 煩惱の海を渡る舟の纜を解へき筈なるに。左になくて日夜に三毒の劔を磨き。朝暮お五欲
 の索を紐ふ。今日の面々諸悪莫作の法度は守れず。衆善奉行の作法の慎まれず。假令須彌
 を負て虚空を走り。大山を挾て北海を越る例はありとも。我等か成佛の縁も便も絶果し
 徒者を如何なる慈悲深遠に渡らせ玉ふ彌陀やらん。斯る凡夫の身に替て。願行を勤め功
 徳を勵み。身体髮膚は碎るとも助けそおの置まし。皮肉骨髄は粉になるとも救はずに置
 ましと。手強き誓を建て嚴き願を發し。五劫お永く御胸を焦し。永劫に久く御骸を煩し
 め玉ひ。或時は毒の索に縛られ。又或時は苦の鎖に繋かれ。難作能作の御苦勞。難忍能忍
 の御艱難。忍ひにくひ愛目を忍ひ。堪難きつらさを堪えぬき玉ひて。終に十劫の曉に至心
 回向と圓滿し。願生彼國と成就して。十方の群類よ三世の衆生よ。願はなくても苦しから
 ぬと。行の持たても構はぬと。一心に頼め一向に縋れ。縋るほどの族ら頼むばどの輩ら。
 餘さず漏さず落さず残さず。光明の舟につみこみ攝取の錠を下して。再び迷の湊るの戻す

ましとあるか。彌陀法皇の大願力。

第十三席

情観ニ世間轉變一者哀傷之淚餘袖。静思此身浮生者愛懷之悲銘肝
 愚迷發と昔法師の書殘宜なり。世間春來夢榮花何實。人身水上泡浮生誰
 心集 往生 留 十因 となさくときは戦々兢々如臨深淵一如蹈薄氷論。脆き危き人界一露
 をなと化なる物と思ひけん吾身も艸にをかぬはかりと業出る息の入るを待ぬ此身なれば。
 夢とやせん現とやせん。生は日々に遠かり。死の夜々に近つき。若きのみな老にいたり。
 新しきいつわに古さにかわり。會は別れ滿れの欠る。粧は耳ふれ眼にさるることなれ
 は。今更驚くへさふはあらねども。昨日まで言を交るし。友の今日は葬所の煙とのほり。
 昨夜まで契を通せし。人の今宵は位牌に名を拜する。体。思ふはく頼み些き世の習ひ。
 管絃絲竹の慰みも何ふかはせん。朧月醉花の樂みもまた苦みのたねならん。茲を以て昔よ
 り賢き人は。假初も人世の化なることを能知て。生に有ても死を忘れず。樂に有ても苦
 を願る。彼前漢の武帝の如きは。歎樂極兮衰情多。少壯幾時兮奈何老。と曰

ひて。萬乘の安きに位し玉るとも危きを忘れ玉のぬ。しかるも愚かなる浮世の放蕩子。當
 世の探花子。曾てその理りを辨知らば。全盛の春を花鳥の感に扣き。僧上の秋を月雪
 の興に。競て風流の揚履に。粉飛ひ。華奢の茶坊に紅跳るをうれしかり。肉の林に唇を
 鳴し。酒の池に舌鼓を打て樂み遊ひ。鯉の魚軒は客を登その具。燒鳥賊は鼻毛を延せの設
 なれども。それには心もつかて。汎くと五尺笏女の手巾にはたされ。連鼓の三絃ふひきとや
 されて。花を牢頭か支の股に咲せ。露をまつしやの文作にうつて。一杯。又一杯。左りに
 旋る簞子は音羽の漣をひき。右に轉す盃は武蔵野を酌ひ。献た酬た間か支か。減な覆な飲
 や哥や。一寸ささの暗の目迷ひ。浮かせや諫けや心鹿げや。氣疎ひ堪らぬと肝み徹し。夏
 をしらす。冬をしらす。遊慰てそれを樂みなりと思ふとも。節季の算盤お桁か迦れ。拂
 の金に小尻の詰た時の苦しさ。初の樂に。百倍増つて衝なけれ。これ初の樂は後の苦の
 下拵ならそや。寶龍樹菩薩の智度論に。一切衆生の苦みの新きを樂と思ふと示させられ
 じに違なく。よくく思ふは娑婆の樂みはみな苦みの實生なり。故に彌陀の大悲これか爲
 に。拔苦與樂の本願を調ひ。極樂といへる土体を構ひ。頼め助んと喚かけ待焦れ玉ふ。御

姿に絶りよる程の行者。頓て往生を遂て見たれば。無為無漏なるゆへに移りもせず一立古
 今然なれば替りもせず。不寒不熱のゆへに暑からず。寒からず。不生不滅のゆへに老と朽
 せず。金剛不壞の体なれば。病もなく煩もせず。目に見るも樂み耳に聞くも樂み。鼻をか
 くも樂み舌に味ふも樂み。身に觸るも樂み意ふ思ふも樂なれば。六根六識六境界。本の
 實の樂。直の御馳走に逢奉るふ疑となす。

第十四席

敷レ装樹花化レ風散。蕭翠庭。芋。遷レ霜。枯。加レ之。槿花一晨之榮。無レ
 夕郭公數聲之愛。不久焉視聽之所。觸。併。雖ニ發心之便。世事無レ暇
 都不能ニ思寄。と笠置の上人の操言せられしも實去事と。朝露の命消やすく。蕉葉の身
 保らかたければ。壯年か頼みあもならずと。達者な加宛にもならずと。薄氷のうすきこほりを
 踏よりもなを危きは人間の分野。年月不レ圖遷。俊山水。流。庭。身体不レ覺。衰
 危ニ舊宅向。風發心。と傳る「逝水の歸らぬ今日を惜めた。若きも年は泊らぬ者を。從三位
 とさくとも。光陰は飛箭走駒より疾けれとも。人間念として月日の過を覺ると。世事

忙々として身命の促るをも辨るす。近き内にすて、行く憂世とい思ふとも身を。過き世を
 渡る營みのかりに心をうつし。頓て赴く死出の旅とい知乍ら後生の貯は露ほどもせし。寔
 に心あらん人々の。無常の念々に侵すことを覺り。冥塗の歩々に近くことを驚て。黄泉の
 遠き路の糧を包み。苦海の深き流れの舟を懸ふへさに。左はなくて煩惱に年月を送り。妄
 念に日夜を過とこと。未來の後悔何事かこれにしかん。無レ爲空死。後致レ有レ悔と
 は道教經の金言「山の端に影傾きて悔さく空く過し月日なりけり。親王 とい古人の詠歌。
 莫レ道老來初學レ道。古墳多是少年人。とは白樂天か誠め。實老少不定の國なれば
 猛きとて頼むへからず。衆苦充滿の境なれば富りとして誇ることなけれ。古き塚を吊る多
 は是れ少年き人なり。朽たる率都婆を尋ぬるに老人の墓尤も稀なり。拙哉斯る世の例し眼
 に遮り耳に盈れとも。思寄て驚く心ろもなく。頭に千丈の雪を戴き。腰に梓の弓を張り。
 面ふ四海の浪を疊み乍らも。尙百年の畜をなし。此世の望み捨難く。富貴を思ひ榮華を願
 ひ。流轉生死の業因は成せともく飽足らやして是を愛し。出離解脱の方便は。かしゆれ
 ともく倦くして曾て進まぬ。斯る徒ら者の爲に設け玉ひし四十八願。罪持乍ら障抱乍ら

雜行の甲を脱ぎ難修の鎧を解き。橋慢解怠の太刀を納め。自力疑心の矢を廻して。南無阿彌陀佛の幡下。降參し奉り。助け玉ると手を合せたれば。其の當体に極樂聖衆の御方に備り。五々の菩薩の兵と交り。追付け西方の城郭に籠り。俱會一處の千秋樂。哥つ舞つの樂みを得るに疑ひなし。

第十五席

宛轉娥眉能幾時。須臾鶴髮亂如絲。とは劉希夷か悲三白頭一の詩。昔斯朝市紅顔士。今則郊原白骨人。とは蘇東坡か骨連相の作。淺茅原纏黑髮昨日まで誰か手枕の上置らん。との能因法師の哥。寔に昨日まで。名聞の車に乗て愛欲の人と伴ひ利養の林に游て。坐華歌月の榮花お身を窄し。花香風流の戯れに姿を移し。心の儘み明し暮せし大臣長者も。息止て野外お葬り。東岱一片の煙となし。てぬれば。残るものは骸骨のみなり。昔し翠黛紅顔の粧ひ花よりも猶香しく。玉の簪照月の姿た傍くも耀くのか。嬋娟たる兩鬢は秋の蟬の翼さ。宛轉たる雙娥は遠山の色とを見る。秋の夜月を待ち僅お山を出る清光を見るか如く。夏の日蓮を思初めて氷を穿つ紅艶を見るよりも尚潔く。

綺羅を鎧り衣裳を薰し色を衒ひ媚諂し美人傾城も。魂去て郊原に送り北邙一丘の土に埋みぬれ。自ら是れ土となるなり。寒洞之夜月獨留三影於荒原之骸連峯之曉嵐。纒問哀於塚側之松。と貞慶上人の口説かれしも實去事。孟蘭盆に塚の側の艸を挽き石塔の前の塵を拂ひ。燈籠油を播垂てくるも孫子のあるうち。忌日々に花を捧げ線香を薫らし。阿伽の水を灑てくれるも子孫の絶えぬ間たのかり。年月過去て見られの叢に嗽く蓋と。印の松に鳴く蟬の音より外お音信る者もなく。思ふはく淺間敷身の行末。頼みなき世の分野。斯る無頼き浮世に執心せんよりも急き安樂淨土を歸りたさものに非すや。越難き生死の海原には。先達て彌陀慈父より。私誓の御舟を棹迎る下されたれば。早く雜行難修の纜を解き。自力疑心の錠を切捨て。若不生者の順風お南無阿彌陀佛の帆を擧げ。助け玉ると乗込むはかり。櫓も槓も自はどらて法の道唯船人に身をは任せて兼壽。煩惱の風暴く妄念の浪立つに付けても。唯本願の舟お乗得たることを喜ひ。南無阿彌陀佛々々々々々と報恩謝徳の舟哥々々て。頓て淨土の湊入を遂げ損はぬ容か何よりの一大事とかし。

第十六席

世間何物得堅牢大海須彌竟磨滅。人生還如露易晞。雲臥紀談に見たる佛惠禪師の北邙行「有と見て見るや世常手結ふ水にさなから月を宿して。」とは柏玉集たる載たる後柏原院の御製。寔に三界六道は都て無常を免るゝ所もなく。僉將磨滅に歸し。須彌山の高大なるも毘嵐といふる風一たひ吹けば忽ちに塵となり。四大海の深廣なるも。日輪七つ出れば悉く涸れ渴くとある。是もまた常ならぬ世の鏡なり。松樹千年終是朽槿花。一日自爰榮。易と唐人が嘆き「憂き秋の紅華に漏るゝ松か枝も千年を待と雪折れの聲。高倉と日本人の口説しもことほりかな。松の常盤の色を籠めしも。千歳を待ぬ雪折の枝あれば。玉椿の八千代までとも。祝はれぬ浮世のあるな。不生不滅の佛たに畢ふ栴檀の煙と立昇らせられ。化野の露と消去り玉ひぬれば。上は紫宸清涼にかしつかれ玉る。天皇雲の上人も。下は柴の編戸垣生の小屋も超伏する。賤の男賤の女も無常の刹鬼は免れぬ。不老の神薬も不死の仙術も。有名無實の虚言。彭祖か七百歳も東方朔か九千歳も。是滑稽言不徒らに塚際の苔も埋もれ。渭濱の波に鉤を垂し。太公望も竹林寺に嘯さし。

七賢人も空く後代に名を残と分野。耳ふ盈れば榮英も榮花も夢なり。歡樂も悲喜も幻なり何ぞ其れ娑婆に執着の思を泊んや。莊周か片時の眠の中に胡蝶となりて。百年の間た花園に遊ぶと見て。覺て思ふは暫の程なり。人間の一生を借々思續るに。耶那の夢枕た片時の眞睡ひ間た。假令本意をどけ樂み榮えたりとも。また暫の夢なるへし「夢をかし喰ふ」思ふ有増を叶るたりとも幾程の世と。」と定家卿の嘆息せられ。不如只水泡命未消之前。務企來世之。營風前燈。薪殘程。宣脫三險。難之道。と解脫法師の示されしも貴き言の葉。早く萬事を閑き急ぎ餘事を。本願も歸し名號を稱る。未來を願陀に託る往生を他方に任せぬれ。御助けは一定なりと落居してた。南無阿彌陀佛。くく。と。報佛恩の稱名のみを肝要なる。

第十七席

有生必有死。早終非命促。昨暮同爲人。今日掩鬼絲。と陶淵明か挽哥を擬したる辭「世の中を何に喰るん朝曙け漕行く舟の跡の白浪。」とは清輔か袋舩紙に載たる續拾て。實生者必滅は累葉不易の御條目。轉變不定の古今絶偽の御格式。無常の使ひの有

智高德の君子にも禪らす。抜精の鬼は智謀武勇の良將をも恐れず。富も貴も一度の鳥邊野の煙と昇り。賤も貧も畢には化野の露と消ゆ。乍無乍有既如浮雲。忽顯忽隱。還似水沫。苦樂天獄之際。憂喜人畜之差。集「先達つも留るも同じ夢の世をよそに驚く身さる墓なき集 玉葉 さしも名高く三千の門弟子を扶助し。七十餘國を經回し。仁道の道を布教るたる孔子も。一簞の食一瓢の飲を陋巷お構る。肱を曲て枕とし其中ふ樂を得たる顔回も。定業の風は免れず。賢くも潁川の澄めるに耳を洗し許由。牛を牽て歸たる巢夫。周の粟を食せしと。首陽山に餓て死ける。伯夷叔齊も體へ去て名ひかりなり。何國にて風をも世をも恨むまし芳野の奥も花ひちりけり。」と藤原の定家卿も嘆かれし如く中華も日域も月氏も。生れし者の死なぬ例しハ習てなし。唯西方の極樂る生れたる者こそ何日までも死ぬると云ことを聞かし。爾れば面々かゝる有爲の世界を執し。有侍の此身を愛せんより。速疾かに願ひ求めたきは後生の大事。継り寄りたきは彌陀の本願。願ふと云に行義もなく。頼むと云に作法もなし。佛智の嵐に自力の雲を拂ひ。他力の風に疑心の霞を散らし。宿善の春を待て煩惱の雪を消され。罪障の氷解かれて。身口意業の艸も木に

も。助け玉へと信心の華を開かせ。嬉しや南無阿彌陀佛忝なや南無阿彌陀佛と。報謝の句香く追付け極樂浄土の蓮の臺に。大般涅槃の證りの菓みを結び損ひぬ容か肝要也。梟。

第十八席

初中後年有ニ何所レ時命即隨レ日促。身口意業所レ作多是罪。數亦追レ時増行住坐臥所積。放業とは藤原の貞慶房の嘆息。「世の中を夢と見るく墓なくもなを驚かど吾心哉。」とは西行法師の述懐。とも人間の浮生なる相をつらく観それ。凡そ墓なきものは此世の始中終まはるしの如くなる一期。本の滴末の露よりも繁しと聞くときは。後れ先達つ老少不定「鳥邊山知るも知らぬも哀れ言ことをあまた立つ煙りかな新後拾片時も由斷なるまじきは。後生の一大事なれども。哀や愚癡の面々の。万劫に一回遺集 片時も由斷なるまじきは。後生の一大事なれども。哀や愚癡の面々の。万劫に一回ひ得たる人身を徒らに捨て。多生に希に値る佛法を都て信せと。輪回繫縛の業因は。なせどもく飽足らすして是を愛し。成佛得脱の方便。おしゆれどもく倦く懈て習て進まず。總々乎として月日の過るも覺るす。忙々然として身命の縮るをも辨るす。無義の戲論に日を暮し。無益の雜談に暇を入れて。惜むへき光陰を惜まず。急ぐへき後生を急かそ

して。三塗の舊里に歸り。八難の險阻も迷んこと悲てもなを餘りあり。鹿強煩惱令
 人覺。只無義談話耳不覺而常障道。と惠心の往生要集も嘆かせられし如く。
 人毎も口指よせて語るは何事と尋ぬれば。祖父は山る柴刈に。祖母は川る洗浴の仕容か
 悪ひと嫁を誘る。嫁は下女と私語で姑婆を悪口ち。茶香の座敷で髻親仕か一越あけての
 盗人斬。女中の片邊打寄て。人の噴するも構はそ。聲を呂み落しての影言。隣の婿の顔
 備る切髪の厚さより。物腰の高太さ下駄の鼻緒か太遇て男伊達を見る容な。否向ひの花嫁
 の二休物か花美過る蹴出し淘掛け八文字。庭を歩くも太夫行義。胸高帯に取上島田。傾城
 めきて否らししと。取紛せかきさせ浮世の噂さふ罪造ること淺増さ。斯る無益な雑談する際
 かあらは。南無阿彌陀佛を稱るよ。片口半稱といへとも是を稱れば佛意に契ひ。本願に相
 應するゆへに。功德利益の廣大なること限量あるへからと。猶更行住坐臥時所諸縁をるら
 りととあれば。面々家業を旁にせず。仕官奉公の身分ならば。月落鳥啼く早朝霧を拂て御
 前ふ詰め。風林星飛ふ晩まで君も官仕を勤め。百姓ならば鎌鍬の柄を採て。春耕し夏耘り
 秋刈り冬収め。商賣人は銚衝を腰にし。帳面を肩にし算盤を胸に弾て。東西も走り南北に

往來し。市廊店舎を徘徊し物を賣買道ふ抱り。織女の糸を繰り織を機。大工ならい棟を負
 ふの柱を作り。梁に架するの桁を拵る。獵師は山に綱し海に釣し。それく巳か職分を守
 り。所詮大黒殿の丸頭巾上を見ぬ分別。夷殿の襷掛もかせくに如くいなさきものと。家職
 大事の眼をひらき。儲けへし施ふへし仕末をふし遣ふへしと。理も契ひ道も背かす節も程
 を身も行ひ。金錢いらぬ御念佛彌陀を頼むか上分別。不論心亂不論不淨の御勤め。世に交
 て止むことを得ずは。口に魚鳥を食ひなからも。心には佛恩を念し手に生看著を持なから
 も。口に佛名を稱る。花の下にも月の前にも彌陀の御恩を忘れず。九夏三伏の熱き日も南
 無阿彌陀佛。玄冬素雪の寒き折柄も南無阿彌陀佛。春日花に對して。彼黄金樹林の英
 を思ひ。秋夜月に對して。四十八願の月を思ひ。娑婆の炎熱も對しては。淨土の涼風を戀
 ひ。此土の嚴寒に對しては。彼土の温和を慕ひ。秋の夜長々として虫の音枕に近き。搗衣
 の音喧く冬の夜の狹席。牙て埋火の灰かさなて寝られさる時折も。彌陀の名號稱るつゝ
 嬉しや忝なやと。稱名高聲を耻と喜ひたさきものなり。

第十九席

昔爲三万乗君一丘土との文選に見るし中夏人の口號「後しと常の御幸は急しを
 煙に傍はぬ旅と悲き」行成御悲圓融とい長明が十訓に載たる大和人の言の葉。盛者必衰會者
 定離とくどきは。滿れば欠る世の分野。玉の簾錦の帳も萬歳の粧にあらす九厭へし。金の
 臺銀の階も千秋の栖ならねは曾て由なし。昔は清涼紫宸の玉臺。に四海の主と愛かれ
 御座せしも。今は民村白屋の外土に。八重のもくらみ埋もれ玉へる例し目前も遮り。翠帳
 紅闌の中に三千の君と仰かれ。龍樓鳳閣の上も二八の臣と崇められて。辨才世に喧く威
 勢を朝に振し人々も名計り留り。威陽宮も徒らに片々たる煙と登り。姑蘇臺も空く讓々た
 る露繁し。宮も葉屋も果しなれば。免ても角ても世の中は。只蜻蛉の假の宿栖果まじき
 所なり。出る息の入を待ぬ身なれり。朝露の日に向ふよりも危く。生死不定の命なれば。
 蟬辨の夕を待よりも短し。碧綠紺青の髮筋も。終ふは塚際の芝に纏ひ。莊嚴柔和の姿も
 またこれ野邊の骸骨なり。争てか悲まさらん。蘭香の家もいまた無常の嘆をば免れず。櫻
 梅の宿もなを別離の愁に迷へり。假令大夏高堂の家居は花魔を盡し。鳳凰の堯か空にか
 けり。虹の梁り雲に交り桂の柱ら横の椽き。高欄のたかきおはしまは銀を指とし玉秋のた

まのいしたるみ温にして。瑤瑤の垣琥珀の壁。錦の帳いかめしく構たりとも。今おも息絶
 眼閉なは何にかはせん。築柱を金欄巻おしたしと望むか如し。縦ひ美しく金欄に巻て掛り
 ぬるとも。作つる罪科は遅れ難く。氷を欺く鎗の鋒頭お刺貫かれなは何の益かあらん。又
 た朝夕の食物は旨さを好み。梗梁春き白ことくしかの牙の如く。ひて糠を去り炊て飯と
 なし。秋風に松江の鱸を求め。龍門の鯉をとらせ。膾はその細きを厭はず。春雨に洞庭の
 鰻を釣らせ。南海の魚を綱させて。灸はその方なるを食ひ。八珍五菓の膏味を調る。山
 陸江湖の名物を集て。縦に口を甘したれば逆も。出る息に阿へと云て。入息に呼へと。
 反て死ぬるときい。何の甲斐あることもなし。猶人蒸吞て首溢る容なもの。偕衣裳にも
 美麗を飾り。狐革の繪り冬暖かに。氷蠶の羅夏を知らそ。蜀江の錦吳州の綾に身を纏ひ
 たりともまた争か頼まん。彼吉田の兼好か。雪佛の莊嚴なりと喩られしも實去事そ。ほん
 ふ思ふは雪佛を極彩色にしたしと云ふ如く。身を思の儘に彩色してからか頓て消去く命な
 りけり。斯どの思知りなから墓なくも富貴を願ひ。愚かお惑て榮花を望む。終ふは山川の
 藻屑となるへきなれども。捨難さの血肉の骸なり。思ふはまた野外の土となるへきなれど

も。惜まるる者は分段の腐なり。悲かな無上の佛種を孕みながら。無始流轉の凡夫と。後指をさいるとも此妄念ゆへなり。痛ひかな二空の満月を具なから。煩惱熾盛の惡人と。浮名を立らるるも此妄念ゆへなり。免角に此世を惜み。身を痛はる妄念の絶ぬ間たは。有爲の苦みを免ると叶ぬ。しかるに茲ふたのもしき彌陀の本願。かゝる妄念ありながら頼むはかりて。佛にならるる一超直入の御法。これを信すれり頓ち三塗の絆をきり。すみやかに法蓮の樂みをひらく。聖衆來迎の蓮華に。貴きも賤きもともに乘せ玉ひ。佛智弘誓の船筏あり。富も貧きも同じく渡し玉ふとあるから。寔心あらん人々は。肝心を碎き骨肉を捨て。も求むへさの他力の信心。血脉を屠り身体を抛ても。望むへさの安養の淨土なり。はやく善知識の案内者をたのみ。淨土まわりの道しるへを承わり。難行難修の脇道は目もやらず。本願の杖にそかり他方に手とひかれて。南無阿彌陀佛の錦をひるかほし。極樂淨土に往生させて戴き。慈悲の親公にゆるりと御對面を申上ん者を。嬉しや忝なやと大悲の佛思をよるこふより外なし。爰を善導和尚も努力翻迷還本家と釋し玉ふ。さても今日の面々はからすも。隨緣真如の涙に漂ひ。本覺の都をまよひいて。慈悲の父母にも別れ

しより。唯今まで虚然流浪とさまよひ。父母ありとは夢にも知らず。淺間敷も二十五有の問たに。迷子となりしを彌陀悲母の大悲の。法藏菩薩の昔しに。不圖不便やと思召初しよりこのかた。五劫の思ひをつくし兆載永劫の久しき間た。わか迷子を尋ね出して。極樂ゑともなれんと思召て。難作能作の御苦勞なされ。四十八願ねんころに。吾迷子やあると喚給へども。二十五有のうち何處か爰にありと。答ふる聲もなかりつるほどに。慕悲み給ふ佛の御心の中ら。無なん遣方もなく思召けん。しかるに今般ひ釋迦の教に依て。一念發起の口をひらき。南無阿彌陀佛の聲をわけなは。遙かに極樂の彼方みて。聞召して何計りか喜ひ玉ふらん。其故は十劫正覺の曉きより。廿五有の霧を拂ひ。我等か行衛を尋ね。幾度か忍辱慈悲の御袂を。大悲の御涙に絞ひ給ひつらん。今回この閻浮提にて。初めて南無阿彌陀佛と母の御名を唱るをさこしめして。又喜の御涙に攝取の御衣を濡し玉ふらん。母の子に回り逢たる悦ひの。また上もなきことなり。彼三井寺の謠にも。偶々逢ひ見る嬉しさの。佛に似て母よと名乗ること。吾子の面牆なれと。子故も迷ふ親の身は。耻も人目も思われとと書たる如く。佛と凡夫との品こそ易れ。子を思ふ悲みの同事なり。このゆ

へに赤なくも大悲の彌陀如來。滿月の尊容を窄し。苦海の浪を凌ぎて。御足を本誓に濕し御手を攝取に垂れ玉ふことを思ふ。悲の涙もさきたち身の毛もよたつて。有難く感涙とよめかたし。斯の如くのことゆりを思知らは。人のすゝめを待つことふあらず。我と佛を戀懐かくし思ふへき苦なるに。流石か凡夫の淺増しさにて。佛に疎縁に暮すことなり。親の千里をゆけども子をわすれぬ。誠なる子に有て千歳を經れども親を思ひぬ習とは木いま身の上に思ひ知られた。彼善光寺の如來の。聖德太子に告げ玉ふ御哥とて「待兼て恨むと告上皆人に南無阿彌陀佛の聲の遅きを風雅と。更に思はぬ子をたにも慕ふの親の實なり枝折山頼まぬ人をたに助けんと思召す。佛の御慈悲なれ。助け玉ふと願ふ念佛の行者を何とて如來の捨て玉ふへき。世間にも不孝の子さへ親は哀むそかし。増て孝行なる子を何と親の惡むへき容なきか如くなれば。一向ら念佛を申して極樂を願ふへし。行基菩薩の常の玉ひしは。不在淨土何有稱。思所不在聖衆誰有願。心人乃至速。擲名利欲上進。臺常願。稱名云云。蒐る教をさくにつけ。早く迷の旅路をのなれ。故郷の空に歸らんことを思ふかし。かの越鳥の南枝に巢を造り。胡馬の北風に嘶ふも。故

郷を慕ふの志なりと聞し者をや。家路に販るには疲をも願みぬ習なるに。極樂の歸るさに成て。念佛の足のやとらひがらなる。またるし。唯南無阿彌陀佛々々々々々々。御報謝の足早急くこそよけれ。

第二十一席

雍上朝露何易晞。露晞明朝更復落。人死一去何時歸。とは。搜神記に著たる漢人の挽歌「化野の露もちりては又とをく消て相見ぬ人を墓なき。」とは龜山七百首に連ねし和人の風雅。寔や白露に風のふさしく秋の野に。つらぬきとめぬ玉の散ける爲体見るに墓なき露たにも。又明朝も艸葉の上にと。また頼母敷こともあるに。何に噓んかたもなき人間の墓なきに。二つの眼忽ちに閉ち。一つの息なく絶ぬれば。夫と此世の暇乞又と再び回り逢ふこと叶ぬ。壞滅の利鬼の五蘊の身を噉ひ。有侍の羅刹は四天の質を侵す。魂ひ去て身冷かなるときは。六親屬類あつまりて。歎き悲めども更にこの甲斐なく野外を送りて夜半の煙と作し果てぬれり。白骨のみと形見となる。昔見人今無唯訪。絶跡之芒屋。今聞類。忽去亦埋荒砌之墳墓。と笠置の解脫上人の嘆かれしも

尤かな。指を折て情々死したる人を負れば。去年の昨日や今日までも。参詣恭敬に誘ひ合せ。上參下向に手を携たる同行も。鳥邊野山の煙と昇り。花見月見に倡ひ合ひ。連歌誹諧に席を並へし朋友も。化野原の露とさる。飛脚の親仁も行着かる。紺屋の御婆も相果らる。本に思ふは残る者いわか身ひとつの容なれども。打驚て佛道修行する意も起らず。煩惱に骨を折り罪障に身を苦しめ。また來年もまた來月も。無間地獄の下拵る。過つる朝も過つる夜半も。三塗惡趣の下拵ひ。三世の如來あり。五障三從の作法しらすと浮名を立られ。十方の薩埵には。十惡五逆の法度やふりと評判を付られ。無有生死出離之縁とたのみよるへき方もなき面々なれい。今ふも無常の風ふ吹立られ。命の花の散行かは。骸の野邊の塵塚にすてられ。魂飛て死出の旅ひ。阿房羅刹の火の車。むくつけなき炎魔王宮の白洲に引出され。桔せ柳せ高手小手。道欲ふ責さいなまれ。後段の手詰か阿鼻の苦み。皮を剝かれ肉をさかれ。筋を断れ骨を碎かれ。肝を切られ髓を拉かれ。或は鐵に炙られ釜に煎らる。其段に及んでい假令ひ黄なる汗を絞り。赤き涙を流し天を仰き地を扣き。齒を食とり身を悶る臍を嚙て後悔すども。再び跡る飯らぬい此度の一大事なり。故に彌陀の大悲

斯るなれの果を不便に思召て。五劫思惟ふ御心を惱まし。北載永劫に御身を苦め給ひ。或時は八熱の炎ふ袂を焦し給ひ。又或時は八寒に裳を閉られ給ひ。積功累徳の御辛勞。諸苦毒中の御難義。言ふ餘る大慈悲より。若不生者の願を立て。不取正覺の誓を起し。十方衆生一りも漏さし。三世の群類一つも残さし。自力を捨て、一向ら頼め。雜行止て偏に信せよ。信する程の者頼む程の族。主へ選ひぬ相手は嫌ひぬ。其當体に正定の位を譲らんとの大願なり。正定は即ち阿毘跋致なれば。便同彌勒次如彌勒此世から早等覺の彌勒菩薩と同行ととなり。彼をたまたまに景清も花見の座あは七兵衛と連れし如く。寔み平家の侍。悪七兵衛景清と云ふ名をさきは。急度強ひようなれど。春の花見の幕の内ては。常の七兵衛八兵衛と同じ容に打混して。御免互の挨拶やめ。獻て酬て間の手を。つゝてんく。杯と引掛け。どれか主なら家來やら。錦に木綿こきまかせて。三獻柏子の四海波。舌もまはらぬ御代なれや。免角浮世は斯した者としてかけねは面白ない。寔にやは等覺無垢地の彌勒菩薩と承れば。何とやら急度した御名なれど。今念佛の花見の座ては。吾等と同事智慧の錦も脱捨給ひ。醜な親仁目の盲れた御婆も。粧美き彌勒菩薩も。打混して。同じ容に更に隔てぬ

御講衆ととなり。是やこの聖道の御定りは最初一万劫の修行をなして。十信の位に至り。それより一大阿僧祇の修行を勤て。十住十行十回向の三賢の位に至り。さてそれを過て初歡喜地の位より。第七の遠行地に至るまで。二大阿僧祇の修行を勵み。それより等覺の位までには。三大無數劫を経て修せねばならぬ。爾るに今日の吾等は。一念發起の當頭に三大無數劫の修行をなされし。彌勒菩薩の同行になるとい。さて冥加も余る仕合せ。時ふ遇は鼠も虎になるとやらん。思ふはく果報日出度き面々。舜何人ぞ自何人ぞ。姿を顧れは五障の女人。形を調れば十惡の罪人なれども。佛智回向の信心の。彌勒に耻ぬ南無阿彌陀佛。かの古も慈鎮和尚。金の佛を鑄立んとて。土を以て鑄形を調る。鑄物師にいひつけたるを仕掛させ。金を湧して湯となし。伴の鑄形をつきこんて一首の哥を詠し給ひぬ「たうらふむ鑄物師か鑄形土なれど中に金の佛こそあれ。」と斯口號み給ひ、あな嬉や外より見れば土で拵る泥で造し鑄形なれども。中ふの最早金の佛か出來てある者と喜び玉ひしとなん。今日の吾等もその如く。外より見れば五障三從の土。十惡五逆の泥で堅めし骸なれども。他方回向の金を一念發起。御助け候るとつきこんて見たれば。早胸の内に

は南無阿彌陀佛の金の佛か出來てある程に。あら嬉や南無阿彌陀佛と喜へよとの御教化なり。爾れば此世からなる淨土の人数「年の内に春は來にけり一年を去年とやいん今年とやいん元方在原。たどひ其身は親の内に居るとても。結納の酒さる濟たれは其領何國其處の嫁なり。たどひ骸は娑婆に置くとも。一念發起の結納さる相濟たれは。極樂淨土の人数一分となり。さては面々今迄は介容の廣大の御慈悲を。疎かふ存せしことの淺増や「逢見ての後の心に比れは昔の物を思ひさりけり」。知らぬ昔しは是非もなし。信を得たる上からは。随分御慈悲を喜ふへし。あな嬉やな昨日の地獄の罪人中間。今日は淨土の菩薩組。組合違ひ及違か替ぬ。居所の早光明の内昔しお替る吾身の上。あな忝や南無阿彌陀佛。

第二十一席

天地萬物之逆旅。光陰百代之過客。とは李太白か筆の號「哀れまた今日も晩になりけり明日と待ぬ命なからに。」とい行生法師の言の葉。實人世の箭の如く時遷り事去り。春過ぎ秋來り。日累て月に至り。月積て年を成す。年々歳々迭ひに謝して。百年の齡慄るも夢現。顔色改て今日の昨日の姿にあらと。死近して夕は朝の命を縮む。

「移り行く月日はかりは替れども吾身を去らぬ憂世なりけり選集。人間總々營業務。不覺人命日夜去と善導和尚の曰し如く。覺るぞ知らず臯々年月は送れども。目の前の五欲に貪着して。未だ解脫の糧を包まざ。夢幻虚假の世間を實と思ひしより。思想覺觀の分別やひとさなく。過去を顧み未來を想像り。現量に暗して日々夜々に消行く身を愛し。時々刻々促る命を重し。娑婆の逗留の減することを愁る。冥途の旅の近づくことを驚かす。煩惱に身を委ね罪障に心を貫き。言も語も悪趣の催し。思も巧も地獄の媒ち。豎より見ても横より詠ても。五障三從の乞食。足より穿鑿しても頭より吟味しても。十惡五逆の盜賊。無量の如來に前にも後にも。永不成佛の銘を打たれ。恒沙の薩埵には右にも左も。必墮無間の札を付られ。東西南北の淨土より。門戸を開て追出され。四惟上下の寶刹は。すねを拂て寄付け給はす最早出離の手段も盡き。逆も解脫の綱手は切る。從苦入苦從冥入冥と冥さより冥さに入り。暗路に暗路を重ねへき今日の面々。五尺の骸方寸の胸の中に。煩惱の城郭を構る。先つ刹生の外堀を深し。偷盜の石垣を嚴し。邪淫の高屏を圍回して。妄語綺語の失柵鉄鉤を開け。惡口の追手頭ハ兩舌の鐵門。貪欲の舛

形は瞋恚の銅門。誹謗の罪樓おは慳貪の豐邪念を連ね。嫉妬の瓦邪見を並へ。橋慢の鋒幡さし輝し。懈怠の統高く聳る。愚癡の元初無明大將を首として。一者不得作梵天。二者釋。三者魔王。四者轉輪聖王。五者佛身等の五障五逆の兵ども。八万四千の士卒を従る。要害堅く楯籠り。みな面々に武具し。罪の甲に報の鎧。障の胸當因果の腰卷。妄想の腕金顛倒のとね當。虚偽誦曲の太刀を帶。貪愛憤憎の弓箭を携る。乞と云は目に見せんと。傍若無人の吾儘。三世の諸佛の軍法に。十方の薩埵の劍術を以ても。亡されぬ愚痴の大將。假令唐の諸葛孔明か智謀に。樊噲張良か勇氣を加る。日本の楠正成か計に源義經か兵法を以ても。此城はかりハ落されぬ。故に阿彌陀如來は五劫思惟に工夫しつめて。永劫修行に木馬庭乗り。的矢芝矢木刀竹刀。弓馬劍術殘る所もなく。稽古探練おそのせれ。十劫の曉天に去來去らは。煩惱の怨敵を亡さんとて。布施持戒の五牧甲に。忍辱精進の卵花威。智惠の錦の直垂に。禪定襟紺の御襦袢。大慈の胸當大悲の腹卷。善根の腕金功德の腰卷。設我得佛のすね當。十方衆生の履を賤き。至心信樂の馬にうちのり。欲生我國の轡をハませ。乃至十念の鞭をわけ。名号の劍を持給ひ。片端摩切り拜討ち。袈裟掛

け梨割り車切り。蜘蛛論達十文字。十方八方切立追立。巻操立控まると去ぬ太刀頭に。難なく無明の大將を打果し給ひ。若不生者。不取正覺の勝凱を腫と擧させられ。何なる十悪五逆の兵て有ふとも儘よ。一度は此本願の幡下ふ。御助け候ると降参させぬをならひ。吾は正覺を取るまじとの大願をかし。

第二十二席

去者日以疎來者日以親。出郭門一直視。但見丘與墳。古墓翠爲田。松栢摧爲薪。白楊悲風多蕭々。愁殺一人。とは文選の古樂府。茫茫野田平極目。歴々古墳如履屋。とは司馬遷か古墳詩。けに轉變不定の娑婆。一人として野邊の白骨とならぬはなし。天下を治め万民を掌ふし給ふ美き帝王も。法界を回り野原を宿ととる乞食も。定業の風を免れず。夜明けは鸞鏡に向て容を繕ひ。日暮れは金細を指て色を衒ふ。娥々たる紅粧の女も。夏の夜の聖教を照に螢を集め。冬の夜の經卷を讀み雪を積む。穆々たる道德の聖も。無常の煙は遁れられぬ。夫といひ妻といひ。天ああらは翼を比ん。地にあらひ枝を連んと深く契りしも。色艶かなる間のみなり。親といひ子といひ内に有ての食

を捧げ。外有ては杖を備んと。厚く孝なるも息ある内へかりそ。傷哉親交レ語芝蘭之友。止遠送。哀哉新結契斷金之呢。魂去獨悲。愚迷發。いかり陸しき夫婦なれば逆も。死出の山に袂を並ることも叶はず。何程たのもしき父子も三塗の河み手を携ることも能はぬ。獨生獨死。獨去獨來。魂の獨り業に隨て飛去り。尸は空く病の床に残る。六親は寄集て泣き。眷屬は打群て悲めども。更にその甲斐あるへからそ。斯てもあらぬことなれば。野外み送り薪を積て灰となせ。唯白骨のみを形見となる。塚に埋て率都婆を立れば。主を失ふ名はかりなり。尙それとても年を経ぬれば荒果て。春艸茂て道を塞き。青苔生て塔を閉つ。印の樹の摧かれて薪となり。墳はとかれ。て田畠となりなん。初め地を占て廟を立しも。後みは姓名さるて知る人なく。子孫も終には零落して跡方もなく。尤哀なるは人の果なり。斯る不定の人間にあらんより。急て常住の極樂を願ひたき者も。蝸牛角上争何事。石火光中寄此身。和漢朗「極樂に生れんことを喜はて何歎くらん穢土のつらさを。一遍跡は野となれ山となれ。唯未來こそ大事なれど。一向らに彌陀に歸し本願に願し奉て。娑婆の患の念々に促ることを喜び。淨

土の樂の刻々近くことを勇て。常行大悲の御念佛解りなく。唯嬉しや南無阿彌陀佛々々々々々々々々稱れは。利劍即是彌陀号一辟穢念罪皆除の御利益空しからと。無始已來衆生の心内ふ。慣習したる煩惱の怨敵は。西方の城主阿彌陀大將。名号の利劍を揮て退治して下され。今の身も意も太平になん治りけり。兎角敵を退治して仕舞はぬ間は。身も心も安堵ならぬ。故に往昔日本に於ても。東夷の叛けるを征伐の爲ふ。日本武尊を遣し給ひ。又た吉備の武彦を副將軍として指向け給ふ。是なん日本に將軍の始めなり日本異朝の例は措て諭せず。已下亦日上代には垣安彦または八十梟か類ひ。夫より後承平の頃純友將門の逆臣等。東西に發て天下の騷動大方ならず。其時も逆臣退治の爲に官兵を遣し玉ふ。まづ藤原の忠文を征夷將軍とし。源の經基を副將軍として。關東を指向けらる。また小野の奸古と藤原の慶幸を大將として。純友征伐の爲に西海を指向けられしかり。逆臣等。且猛威を振ふといへとも。王命に敵し難く將門は秀郷に討たれ。純友は遠保に討たれて。逆徒一時に滅び太平の御代となりぬ。委見今昔物語。夫より後は後醍醐の天皇。東夷の修を惡ませ給ひ。北條を亡はさんとの御企ありて。諸國の軍兵を集め合戦に及び給ひけれども。北條

威勢つよくして官軍ほとんど危かりしか。己下太。楠正成か謀を以てし。赤松等か武勇相加はりて。遂に東夷を討亡し。天皇を再び舊都に歸し奉り。暫く天下穩かなりしか。准后を愛し邪臣清忠に従はせ給ひ。功なき者お賞を厚く與る。功ある者赤松おは賞を與る給ひ。さる故に。終に天下を尊氏お奪はれさせ玉ひ。御一生宸襟を惱ませ給ふ。爾しより已來たの諸國大亂て。互お國を諍ひ怨を結ふ輩らに。駿河に今川氏實。甲斐に武田信玄。越後に景虎。越前に朝倉周防に大内の義高。長門に毛利元就。出雲も尼子の春久。豊後に少仁。大友築紫に菊池原田松浦等。四國の地には河野の一族。近江の淺井佐々木か類ひ。南海道おは三好が一族。松永禪正を初として。小身なるは大家の旗下につき。弱きは強さに押塞られ。臣としては君を弑ひ。父子怨を結ひ兄弟互に敵となり。戦ひ更に止時なかりき。斯る亂世に生れ合は後世の願は借置き或は朝暮金革を衽むし。甲冑を枕にして。命を且暮にまづ輩も有ん。或は己か住家とてもあらはこそ。野七里彼山七里方此方る逸歩き。峰の嵐の松吹聲を聞て。敵の責下るかと太刀の柄を握り。谷川に水の流るゝ音に驚ては。軍兵の競上るかと腰の刀を抜儲て。綱代の氷魚め亡ひ易き命ち。籠の内の鳥の出難き身と成ては

いか程佛法か聴聞したふても聞くこと叶はず。或の野伏等も出合て。死猫兎頭の貯もなく朝夕の糧なけれの念佛のことは思ひもよらと。空く山野に飢死する輩らも有しとかや。偕また邊鄙離嶋に生れたる者は。己か在所の蘭若道場もなければ。佛とも法とも知らずして空く一生を過る族らもあるとかし。爾るも唯今の御世はこれ四方の裔までも。太平に治て竟日は扶桑の嶺の輝き。武藏鞍鎧の指刀も鞘も納り。兵戈無用とは偏に今此時に極れり。殊にやの國土豊かに民安塔の床に臥し。佛法は日夜に繁昌して。寺々もは時々説法の聲絶ることなく。後世の最中なり。このゆへも貪欲心の強敵も。布施波羅蜜の大將に討たれ。愚癡蒙昧も智恵の計畧に滅び。瞋恚我慢の鋒頭も。忍辱慈悲の兵に亡され。佛法の威力の強さか如く。御政治行さ届き天下平かに。五日一風十日一雨風不鳴枝雨不レ破塊論「吹風も木々の枝をはならさぬと山は久き聲を聞ゆる千載子産治鄴城門不レ閉國無三盜賊二道無三餓人二類聚と云ふ如く誠に關さぬ御代とかや。念佛申とに嘗て天下の御法度もなければ。後世を願ふに何の障かあらん。さてく思ふは佛法の畫中とかし。

第二十三席

屠所之羊今幾歩無常之道閻魔之使何時臨朽宅之窓と解脱房の發心策に書れしも尤なり「聞きたるも危き淵の薄氷のそむ似たる世を渡るかな。」と源の和義朝臣の連ねられしも宜なり。年々歳々ゆめの如く明し暮を問たふ。知らを滅行は人間の命。歳々年々うつりの如く過さ行く中に。覺えず近つて來るは無常の使ひ。電光何物鬚髪而忽滅。我身幾程見有焉去上人蓬生に早晚置へき露の身は今日の夕暮明日の曙上人思ふはく余り墓無き娑婆の分野。上は四辨の獨尊を始め。下の五逆の提婆まで。免れ難き生死無常。十善天子も百姓土民も。更に別なくさしも名高き美人の毛髮西施か艶なる肌も。焼けり則ち灰となり。音に響し悪女の摸母。亥愧か醜き姿も埋めはまた土となる。老少不定の人界なれり。假令貴きこと舜禹の天下を持ち。富は陶朱猗頓か如くなりとも何の益かあらん。玉張金圍の中も三千の君と仰かれ。龍樓鳳闕の上に二八の臣と崇められ。所從眷屬に冊つかれて明暮と人々も。煩惱に年月を送り。妄念も日夜を過して。菩提の因を植と。空く死して冥途の旅も赴かは。由來り業の習とて。所從一人連られもせず。妻子珍寶及王位臨命終時無隨者のごとはりなれり。徒や踐の獨旅。かの

後一條の院の如きは。崩御の後ち或僧の夢に顯れ玉ひて「故郷に行人もかな告やらん知らぬ山路に獨り迷ふ」と詠し玉ひ。皇極天皇の如きは。冥途にて信濃の善佐に逢ひ玉ひて「尋常に問人有らは死出の旅泣々獨行と答よ。」と告させ玉ひしとなん。是等はみな一天の君。万乗の主にて在しければ。唯假初の御幸ふたに百官前後に隨ひ。雜色先を拂てこそ美しかりしあ。黄泉の旅ふ出玉ひ。御供一人なかりけるを實悲みの限りなれ「云ならく奈落の底にいりぬれの刹利も首陀も替らざりけり。」とは延喜の帝の御製。冥途の道に王もなし。爾れの面々夢の浮世に心を泊な。早く思案の胸を押ゆ。分別の臍を堅めて雜行雜修の羈を捨て。一心に助け玉ひと彌陀に絶り。極樂往生を遂損はぬ容か何より大事。

第二十四席

在夢那知夢是虛覺來方覺夢中無。迷時恰是夢中事。悟後還同睡起天。この龍牙長老の筆の運び「覺束な誰か手枕に假寐して覺る間もなく夢を見るかな。」とは赤染の衛門か口遊み。寔お今日の我等。こよと自性に惑て眞理を忘れ。覺ふ乖き塵に合して。隨縁眞如の涙に漂ひ。圖らとも本覺の都を迷ひ出てより己來た。業の繩お縛られ

罪の網に罹られ。虛然流浪の孤子となり。貧窮無福の餓人となりて。渺々たる生死の海畔に溺れ。娥々たる煩惱の嶺岫お躑迷ひ。車の庭お回るか如く。此に死し彼に生るゝ分野は夢とやせんまた現とやせん。閻中彌重閣夢上猶見夢。と解脱上人の書れしも宜なり「現をもちかゝ現と定むへき夢にも夢を見とはこそあらめ。」と藤原の秀道卿の讀れしも理り哉。遠劫の昔しは釋梵轉輪の床にも久く住。無始の古にハ焔燃猛火の炎の下にも幾回か焼き焦され。飛類として空を翹り流類として水に潜まり。或時は紅葉踏分け。秋お鳴く深山の鹿とも生れ。又或時は花に飛て春を囀る梅か枝の鶯とも生れ。角をも戴き翼をも重ね。四足ともなり無足ともなり。偶々人同お生れても。人の奴となりては奉公官お暇なく。木樵牧童と成てハ。徒らに光陰を送て佛名を稱えす。或時は罪業ふかき身と生れ。殃に例些き河竹の流れを立る女となりては。日夜に偽を語り。眞少く煩惱の垢に身を穢し又或時の卑き賊の男賊の女となり。或は漁父海士の身とも成ては。明暮れ殺生を營み佛とも法とも知らず。廿五有の辻に革臥れ。六道頼縁の巷に吟行ひ。今日まで淺間敷さ凡夫の身を受け。ほんに唯今此會座て。過つる昔しを思回せば。身の毛戰慄て淺増し。爾るふい

ま多生難値の本願。南無阿彌陀佛の一法は。斯る罪惡生死の凡夫の爲に御成就なれば。出家發心の形を本とせし。捨棄欲の姿を標せず。唯商をもし奉公をもし。獵漁をもし乍ら。頼む一念の約束一つて。容易く助かる御法なり。爾れば面々夢の浮世に執着して。化に月日を送らんより。早く極樂の宿替の用意。煩惱の諸道具を殘らす弘誓の舟に積出し。臨終の夕も有漏の鏡を切り。觀音勢至に櫓楫を任せ。攝取の梶の彌陀次第。無常の風に帆を揚て。娑婆の堺を出汐の波間を漕行き。西方の大港。莊嚴七寶の新宅に。早く遷る容の思案か上々吉と見にけり。

第二十五席

本無今有暫有還無故名無常とは因明入正理論に見ゆる言の葉。大論には相續法壞の無常を明し。攝論に畢竟如是の無常を説き。行作遷流の川の流るゝ如く。念々壞滅の燈の消るに同し。少水の魚屠所の羊目前に遮り。耳底も盈て明かなる生死無常の理り「世の中の人の心の浮雲も空隠れざる有明の月慈鎮」とい云ひながら。天上天下唯我獨尊の釋迦如來たも。八十の春の北頭北面西右脇に伏し。拔提の涙と消玉ひぬれば。東西南北

四の偶。上は阿伽陀天より。下の金輪際に至る迄の諸有る衆生。人間は云ふ及はす蠢々合靈。蝦蟇蚯蚓飛蠕動の類。山野の蹄江河の鱗。水に鳴く蛙菰に啾く菴。松虫錫虫響虫桔梗瞿麥女郎華。鶴鳴四十雀連雀菴翠みそとさとい蛇蚊に至るまで。無常の利鬼の免れかたし。今は昔しかの本因房か辭世も「基なりせの功をも立て生くへきに死ぬる道には手もなかりけり。」と讀殘せしも理かな。漢帝の靈藥も彭祖か仙術も。不老不死の能書り。名越の仙室に遊ひたる浦嶋か子も。壺公か壺の内に入たる費長房も。體は去て名をさくのみなり。或は漢の李夫人唐の楊貴妃吳國の西施。吾朝にて衣進姫や小野小町。花の顔桂の熊雲の鬢雪の肌。柳の髪は炯にして色は紺青の如く。腰は連たる糸に似たりし云はん方なき美目貞。明暮も明鏡に向て姿を繕ひ。金鈿を指て色を衒ひ粧成ての媚をなし。眉を揚ては笑を作り。帝王大臣の美き御方の寵愛に預り。榮花も餘りし美人も。徒らに昔語となりはて。一生富貴皆春夢千里英雄只斷碑と古人懷古の詩に賦し。あわれけり左のかり思ふ事の葉を。叶たりとも幾程の世とぞ。閑時の頼無の世の中や金銀も珠玉も争か頼まん。富貴も榮花も何ふかはせん。鰻魚も一期鰻魚も一期。韋緒露

幕以之禦風雨。羶肉酪漿以之休飢渴。たどひ芦の丸屋に膝を容れ。菹薦にて雨露を禦き。吟の落穂を捨て露命を繋ぐ。貧き身も。此世の夢なり幻なり。唯期すへきの淨土往生と。安心堅固お落居しぬれば。頓て無常の風次第。眼光落地の晩には。本地彌陀の御引接。五々の菩薩の來迎賑々しき死光。身に着る者は無價の妙衣。住所は紫金蓮臺。食物の自然の百味。永く衣食住の三つとも最大自在の境界となる。大福長者と云ふの他力信者。

第二十六席

溘然長往。所有産貨。徒爲他有。冥々獨逝。誰訪。止とさくときは。蜻蛉の有か無かの並の中に。朝露の置けは消ける命を持なから。曉に茅屋の鶏の聲に目覺てより。夜半の鐘の音と共に寐るまては。言も語も思ふも巧むも。作すも勵むも有の無のど。販らぬ昔の事を悔み。惜ひ欲ひと來らぬ末の貯をなし。千貫万貫の金を積むといへども。今にも目を閉ち命終らは。徒らに他の有となるとて。皆人手お残して行かねならねと。淺増や昨日は今日の爲お營み。今日はまた明日の爲に務む。何日何時永欲逝此世。

哉。偏爲此身。造無量業。愚迷さりとては。當所なき一切の衆生や。電光石火の浮世。

老少不定の此身なれり。寔に由斷なるまじき後生の一大事。後の世とさけは遠きに似たれども知らずや。今日も其日なるらんとは。「惠心僧都の讀捨。生年不満足。百常懷三千歳憂」とは文選に見たる古詩。とてお月氏出現の釋尊の。三世了達にして万徳圓滿の佛なれども。無常の嵐お誘ひれ玉ひければ。黄金端正の容をも。迦陵頻伽の御聲の三千世界に響きしも。音にのみ聞て夢にたも知らぬの。況や今日の吾等お於てをや。いかにかして生死を遁るへき。假令樊噲張良か武勇。蘇秦張儀か謀計を加る。太公望か兵術に周公孔子の仁徳を添たりとも。無常の使は防かれず。富も貴も賤も。智者も愚者も善人も悪人も。男子も女子も老たるも。若も在家も出家も。尼も法師も免れ難き。定業の刹鬼なれば。急て願ふへきの極樂淨土。早く頼むへきは彌陀如來なり。頼て見たれば其當体に。攝取不捨の張面に着き。菩薩不退の中間にいり。宿札は安養世界。命終次第に容易く往生を遂るに更に疑なければ。唯念るまじきは南無阿彌陀佛の報謝の稱名なり。假令東關の雲の夕西海の波の晚。假寐の床の艸枕。垣生の小屋の窓の下にて稱ふとも。南無阿彌陀佛の聲さる

あらは。化佛無数の菩薩と共に。來迎せんと御誓願なり。茲を善導和尚は。化佛菩薩尋
 聲到と釋し玉ひ。稱名は聲は佛を招く使なりと。古老人も示し置かれぬ。爾れは面々早
 く他力の信心を得て。報謝の稱名を喜ふへきことなり。報謝の稱名は行住坐臥を選はぬと
 あるなれ。寐ても起ても夜ふても晝にても。たどひ骸ハ六欲の境に置き。身ハ五塵に交
 るとも思ひ出すに任せて。唯九南無阿彌陀佛ハかの淨圓教寺の盤察師の筆記に。
 居三海邊寄來浪洗心隱深谷一峯松風澄思厥推曉の寐觀の牀を。念佛
 の道場と思ひよることなりと。殘されしも最殊勝なる。念佛の稱念容。寔に曉の寐覺は
 心夾にして世路に馳せず。來客の障もなく人靜り。耳口閉れハ念佛をよるこふに。尤を
 のつから勇猛の志あるものなり。曉は心の澄て別れを慕ふ鳥の音など。殊に哀れに侍ると
 西行法師か選集抄五丁ノ廿に書れしも老の眠の早く覺め。夜深く夢を殘したる人々と。慈鎮
 和尚の閑居の友十番上の四お連ねしも。また時しもあれ寐覺かちなるに。聲勝たる限りえり侍
 らせ給ふ念佛の曉方など忍ひ難しと。紫式部か源氏物語第九二十五お綴りしも。みな曉の
 寐覺の枕の下を。靜かなる好き念佛の。となへ所とさためたる味なり。爾れとも中おひまた

世を遁れ。境界を遠さけ谷のふかさに隠れ。林の陰に住てこそ。心靜かお念佛せまほしと
 云ふ人もあれども。相逢盡謂休官去。林下何曾見一人。僧靈徹答と古人の詩も
 も賦せしことく。心口各異の人情た。口頭ハかりあて。實に山はいらたる人もなし。よし
 や山にいり境をはなれたりとも。妄念ハ心より發る者なれハ。心のあらん程は止むことあ
 るまじ。此頃も去る禪宗の俗人の云はれしハ。皆聞給ハ偈も。座禪は好物なり。此間も
 或和尚の示に依て。私も座禪いたせしか。衾の中みて七年巳前の帳のつけをとしを思ひ出
 しけり。是死ぬる迄の徳なりとなん語られしか。奈何様これらは有体な懺悔物語なり。元
 來散亂の衆生なれば。俄頃衾を被り線香を立て。閑なる座敷に居したとて。何とて妄念
 か止むへきと。調度小兒の大道回りを同じことなり。むかしより何國の子共もすることな
 るか。京ては舞々金剛と名けて。我等も幼きときこれをして遊へり。數多の子俱と一同に
 庭を回るに。兩眼を塞てくるくと舞めくりて後ち。大地も動と伏到れて目を開きぬれハ
 最前目を閉てまわりし時よりも。心のうち顛倒して。天地も引繰反をことくおみゆるもの
 なり是を外より人か見ては今迄さはかしかりつる子共か。今は閑かお座したるよと見ゆれ

ども。其坐したる子共の心の内は。初め大道をまわりし時より。地に居りたる時か還て騒かしまのなり。今もそれふ同くしはらく念を被り。手を組て開かに安座したる体を脇から見れば。最殊勝におもわれて。定めて無想の心地お居り。一大事の工夫本分の田地を見開き。本来の面目を悟らんと。羨しき程に見ゆるものなれども。脇より見るとい若干の違にて。靜かなる座に居ると一入種々の妄念萌し起て。しはらくも止むことなく。結句世事を働く時より胸のうちはさはかしく。山猿を柱に繋ぎし如くと。喩る玉ひしも宜なりかし爾れば面々かゝる座禪觀念などは逆も及ひざるほどに。面々家業をつとめながらも。御慈悲を思ひ出しての南無阿彌陀佛。聖人不凝滯於物而能與世推移。古文眞引道心さの堅固に忍辱の衣を着し。慈悲の室に居し法空の座に住せは。縱令斷岸千尺の山中も。怒潮萬聲の海邊も。また何のくるしきことかわらん。峽猿の悲しく啼くはきくに耐え山鬼の跳り行くは見るに堪ととは。それの浮世の人数のことなり。是故に聖光房の言に。昔しより閑居の地を高野粉川といへども。曉の寐覺の枕の上ほど。しつかなる所はなしといひ。空也上人の洛陽四條か辻もまたしつかなりと云へり。しかれば今の念佛行者も。報

恩謝徳の衣を着し。他方信心の室に居し。攝取光明の座お住せは。假令辻堂に詣して一日をくらし。艸の扉に一夜をわかしても。また何のいふせきことかわらん。佛に心鳴海の汐于濁。身は何處にも置つ白浪。白浪のよそる渚に世をそこす。海士の子共の浦風に龍鐘衣着ながらも。心ひとつを法の舟助け玉や。南無阿彌陀佛。稱聲を。取もなをさす彌陀の引接。異香よりも紫雲よりも南無阿彌陀佛と。となふる聲にそさたる往生のしるしや侍るへきと。一條の向阿老人のしるされし。そいとも貴く思はれ侍る。

第二十七席

把鏡照面。心茫然。既無長繩繫白日。又無大藥駐朱顏。朱顏日夜不。如故。といひ白居易か浩哥行「替り行く鏡の影を見るからむ老曾の森の歎をとする。」とは赤人の古風彼も鏡お向て衰たるを悲み。是も鏡に對して老たるを嘆く。共に轉變の世の分野を。鏡を以て知らしめし言の葉。都て我身の上を揉直とには鏡に如くものなし。是故に唐の太宗皇帝の如き。侍臣お謂て銅を以て鏡として衣冠を正し。古を以て鑑として興替を知り。人を以て鏡として得失を明らめよ。朕嘗て此の三の鑑を以て己か過を防ぐと

曰ひ。夢中新話の中は。花と水と雪と月と人との五の鏡を説き分けたり。中んつく月の鏡と云は。かの山頭夜戴孤輪月と賦し。一鏡晴飛玉有華と。呂中孚か春月の詩に作たる趣き。ほのぐと東の山端の晴出る。丸鏡の如くなる明月を詠むるも付けても。世間の無常を悟り。常ならぬ身の鏡にせよとなり。まづ三ヶ月の早くも弓張月となり望月の圓なるも暫くも住らす。傾て十六夜の空となり。一日とと虧行く分野を見て。世の墓無さも期の如く。回逢ひて見しやそれとも分ぬ間に雲隠れあし。夜半の月の昨日と欠け今日と滅行に同じ。人生れて二歳三歳より次第々に成長して。三十歳も成ぬれハ盛の年とて。月なれハ十五夜の比なるか。夫も程なく四十もなれば。下坂の如く一日ととと容も弱りゆく分野は。月の次第に滅行に同じかるへし。斯て次第あかけゆきて。終に月無き空となるは。人間の死ぬるに何を異ならん。誰もみな滿れば傾て欠月の十六夜の空や人の世の中。讀人と古人の讀殘せしも。花は盛りに月の隈なきをのみ見るものかはと云ひ。又た月花のさのみ目にて見るものかはなんと。吉田の兼好か筆に云はせしも。月を見ても吾身の無常を思知り。月の滿るを年の積るも見なし。欠るを命の縮るも思合すれハ。月を

見るもつけても願ひしきハ。後生の一大事ととなり。寔に心有ん人は花に寄ぬ。月も准ても此世の化なることを觀して。速かに他力の佛智を頼り。彌陀の願力を頼むへし。彌陀のむ人は雨夜の月なれや雲晴れぬとも西ゑこそゆけ。眞如堂本尊之詠。一念彌陀を頼し行者は。妄念の雲ハ厚く起り。煩惱の雨は頻りに降るとも。時々刻々西のく傾く月と諸共に日々夜々に淨土往生か近くなる程に。唯嬉しや南无阿彌陀佛く。

第二十八席

年々歳々花相似。歳々年々人不同と賦し。花の色は移るも泉な徒らハ吾身世に經るなかもせし間に。と聊ねしも人の身の徒らに年を経たることを。花も准るて觀したるなり。常の人の花を見は。唯色好き花やどのかり詠めて。嘗て無常を知らず。幾程か存て見ん山櫻花より脆き命と思ふハ院。龜山。花の散掛るを見ても。花計り移易き物にハあらど吾身も傾て定業の嵐に逢て墓なくも。斯く散なん者をと推量て詠たるものも。花を以て常ならぬ世の鏡あせよとは。夢中新話に書し教る。實心あらん人ハは花を見るにも。月を詠るにも人世の化なることを思ひしらて何と仕ふ。金谷醉花之地。花毎春勾而主

不_レ飯。南樓。翫_レ月之人。月與_レ秋期而身何去。とは白居易か筆の運び。汝委_レ地有_二來年_一在人受_レ天無_二大命_一逃_二之_一の凹凸道人の口号。理なるかな花の散ては。又來春は梢に開く。人の死して再び歸らす。「咲時は花の數にもあらねども散るには漏れぬ山櫻かな」智あるも愚なるも留ねは。貴さも賤さも共に死す。左すれば若し逆頼むへからと達者なり逆宛にはならぬ。錦の襪を守る紫鬚の良將も。空く野外の煙と昇り。翠の樓に遊ぶ青娥の美人も。徒らみ路傍の土となる。紅粉の化粧をなし黛の粧を作り。綾羅錦繡の身を纏ひ。金殿玉樓に姿を安し玉ふ禁庭の女官も。終に位牌に名を止め。弓矢を携_レ太刀を挟み。鎧直衣に骸を堅め。戰場軍陣ふ譽を擧し文武の大將も。畢には率都婆に姓を残す。斯る頼み少き浮世の中に心をとめて何あかはせん。たゞ急くへきは菩提の道。菩薩の道と南無阿彌陀佛。他の宗旨の教に。諸惡莫作の法度もあり。外の流義の勸に衆善奉行の作法も有れば。南無阿彌陀佛の有難さ。凡夫の智慧は本より用と。行者の分別は根から入らね。願行を添ゆるには及はず。戒法を足とも及はず。形を替ることなく。姿を窄とまでもなし。烏の鵝鴝く雀の噴く。柳は緑り花は紅ひ。此身此儘ながら助け玉へと信すれば。此世からなる淨土の人數。頓て臨終の夕に。聖衆の來迎賑くしき往生の京入を遂るに更に疑となさ。

第二十九席

孔子在_二川上_一曰逝者如_レ斯夫不_レ舍_二晝夜_一。と論語子罕の篇の戴せ。孟子の水哉とと離婁の下篇に綴りしも。人間の不定なる粧を水に准て知しめたる言葉。川水の流れく_レて跡は歸らざるは。皆人の一日とと老果て。本の壯さみ戻らざる分野。看く流_二水_一暫時不_レ留美人未_レ免_二衰老_一。と蘇東坡か嘆き「流れゆく水に柵ありぬれと若きを泊る柵はなし。」と在原の業平か悲めるも。水を見て無常を悟し本文。寔に覺知の眼を以て詠なは。川の流れに臨ても壽命の縮ることを明らめ曉し。泡の浮ふに向ふて。人世の化なることを思ひ知らて何とせう。有爲の娑婆轉變の世界なれば。何物をか常住と思定むへき。浮生は左乍ら飛鳥川。昨暮お替る今日の淵瀬。初音を哥ふ鶯たに。昨日は花の梢に遊ひ。今日は籠中に雲を戀ふ。奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿も。焦れつゝ飛て火に入る夏の虫も。儼這常ならぬ世の鏡なれば。歴縁對境何あつけても。急くへきは後生の大事。求む

へきは未來の方便なるほどに。夢の浮世に心をとむな。幻の境界に氣をいたむな。一生、盡而希望不盡。命に限りはあれども望みこと極りはなきものぞ。「何迄か明ぬ暮ぬと營まん身は限りあり事はつさせし鎮早く万事を閑て。彌陀をたのみ他力を信して。三界の館を迷出て。六道の郭を立退き。追付け極樂の故郷を戻り。頓て淨土の親里を飯て。老を朽せぬ樂を得。動かす願かぬ證を開んこと。偕も貴や南無阿彌陀佛。

第三十席

白髮三千丈。縁愁似個長。不知明鏡裏。何處得秋霜。と唐人の佳境「拂ふともよも消やらし年を経て頭につもる老の白雪。」との大和の風雅。光陰如矢月似弓。百年の壽命といへども。只に呂生か一炊の夢。昨日までも盛にして身を健かふ。力逞く軽く荷ひ重きを負て。疲れたることをも覺ゆるさりし身も。何の間にか八年積り齒傾きぬれ。齒も落ち肉も消。筋も緩り色も瘡み。膚も悴け力も弱り。言とさは息喘き聲慄き。頭動き手振ひ。坐するときは背曲り腰折け。行ときは杖に扶けられ。思慮も昏み分別も薄らき。飲み食ふに味少く。戯れ笑ふに樂みなく眉も味も眞白にて。銀の針を植たる如く。髮

の左乍ら雪に似たり。雪の積ても春風にあぬは忽消ゆ。たゞ頭の雪こそ消にくけれ。茲を以て異國の高嶺か詩には。人生莫遣三頭如。雪縦得春風一又不可消と嘆し。吾朝の康秀か哥には。「春の日の光に當る吾なれと頭の雪となるを悲き」と悲るも實去事ぞ。齋藤別當實盛か如きは。加賀の國篠原の軍に鬚鬚を墨に染しかども。暫か程の耻隠し洗て見れり。本の白毛。染ても彩ても替らぬ者は頭の雪。洗ても磨ても直らぬ者の額の浪。張ても引ても延ぬ者の腰の弓。目は霞み耳に蟬鳴き齒の落て霜を載く身を哀れなる親假令臍小充る金銀にても買取れぬか人間の命。箱あ餘れる米錢を以ても。取戻されぬは過去し月日一天大王の御位を以ても。今日を昨日る戻せともならず。四海將軍の御威勢を以ても。今宵を昨夜る歸されはせぬ。斯どの思知乍ら三業に罪を作り。六根に障を拵る。明れの骸を煩惱の爲に苦め。暮れば心を妄念の爲に惱し。何の間もとも覺す知す老果し人とは。分て急へき後生の用意。俄へき未來の支度なれども。良もそれの三絃に引寄られて。芝居見物大鼓におひき出されて。傀儡は見にゆけと寺道場を參る者かともせず。内あへはかりつゝて居て嫁を諦め。飯焚を噴る際はあれど。御念佛の一遍も申さず。あらぬ思ひに罪業

を重ねなから。出離の善種を求めんは夫社地獄のよき案内者。命の法の實にはあられて。五十年の生耻か晒足て取残されし重罪人。偕も淺増きことかなと氣か付なり。彌陀を頼め目の盲ても苦からぬを。耳は聾ても構はぬを。腰は二重に杖付の乃の字の形に屈つ。鹽の上の行歩さへ叶ぬとて食着とを。煩惱の山路には本願の車を構へ。死生の海原には弘誓の舟を浮て。智目行足の欠たる凡夫。願骸戒手の叶ぬ衆生。其儘のせて易くと。西方の彼岸を迎取んどの本願なり。

説教集録 (勸化言々海終)

説教集録 (言々海後編) (勸化文選)

第一席

菅原 智洞如達述

今日は日和もよし。時節から無忙しむもあらう。何も克と參詣をあられた。拜上らるゝ阿彌陀如來。いかばかりかは嬉々慈眼玉ふらんなれば。その身くの徳分此上もなき仕合。思へは果報めてたきは面々の身の上ちや。世には少參度志しかあつても。日和か好ければ好きさあつけ。衣物の洗濯に際入り。まんさら裸ても忝られぬから着替の衣裳お事を欠たり。或の纒の參錢に手間などかして。是非なく聽聞の道に疎くしふなる族らもあり。また後の食物の當もなき乞食貧人のたぐい。足を計に貫歩かつは飢て死ぬるか。術なきに。一座の説法を立聞するも得せぬことらや。寔に漢書の中。民貧姦邪生どかき。文選の中。富貴他人合。貧賤親戚離とあらはし。孟子の疏。禮義生富。足盜賊起。貧窮と云ふか如く。ほんに貧乏の病よりも苦ひもの。凡そ生あるものは必ず死する。どの誰も知て居なから。命を惜み身をかかはふは凡夫の氣質。身を遣ひ骨を折り。明日あるこ

とは知り年来あることを思ひ。寒さを防ぐ思案脾胃を養ふ營み。それはどの貯けならては。口あり跡ある内は少時くも暮されぬに依て。今日これくの家業をつとめねは明日の煙か立られぬと云ふ身上ては。どうも寺参もならぬ。いかさま貧は諸道の妨と世の諺云ふも茲のことらや。爾るに在座の面々は。まづ今日の家業あつて。まんまど説法の會席にも列られたは。指當て今日さりの徳分と云ものちや。去年ら余り富貴願る人な。經の中には貪狼於財色坐之不得道と説てあり。寒山の詩には。貪人好聚財恰如二鳥愛一子子大食レ母と誠られ。鴨の長明か發心集あり。身豊なれば念佛の志淺しと云はれて。あまり金銀を過分に貯れは。それかかせなつて後生の道に疎なるものちや。それゆへに佛は有財餓鬼とて。持たうるに貪かる奴は有財の餓鬼と呵り玉ひ。儒道ては守錢奴と名て。錢の番に雇れた奴と笑ことらや去ふよつて。論語にも。子貢曰貧而無レ蹈富而無レ驕何如。子曰可也。未若三貧而樂。富而好レ禮者也とあることくあまり富貴なれ驕りあ長して未來を知らず。あまり貧しければ諂こと暇なくして後生を願はむ。爾れ唯今斯參詣の人々ほど。節身分はなひと存せられて。隨分に法義を

心掛。さて思ての家業を大事に勤められよ。茲を法然上人も。後世のことを初發にして世話のことを第二念ふせよと示し玉ひた程に。士農工商それぐに。身を働かし跡をつかひ。晝意らひ夜勤め。日影に油をつきて。寸陰分影も化あせしと稼てさる。天地に風雨雷震の變あり。人に病患中天の災あつて力あ及す。食こと衣ることには定りあつて。食ねは脾胃倦し衣ねは寒し。そのうち設けは足らて遣ひ張ものなれり。稼てもく足らぬからなも。その足らぬ内から。義理合の外聞のと僭上の付届。是を斯せねは一分たよとなんと人真似はしわし。我物はなふて人の物借て勤むる。貧者もまた欲からなれば唯のかます利合かさなる。それを乞れて赤耻かくの度々なからその一分のたぬの忘れ。分際に過たる襟本身の回りに金銀を費し。後は石て手を詰るやうに我と我身を苦む。ものちやほどに所詮大黒殿の丸頭巾上を見ぬ分別。夷殿の襷掛も稼くに如はなきものをと。家職にも精を出しつゝ法義にも精を出されよ。一座ても参れば参たさりの仕合。一句ても聞けば聞たたけの徳分ちや。今指當て此法座も。自身に得参るまいと思ひしを。父子兄弟。あるひは妻ても夫ても。催促して参らせたり。また友同行のそよめに由て。内證のことは御自分か

内に居ね。明日の暮かならぬと云ふ身代ていなし。教るの御縁は大切なことちや程に。さあ御座れと云ふて誘れた時。今日は用事かあると思へども同行の手前もあり。否といふはれす我屋を出る折は。参りにくう思ひなからも。法座ふ列り聴聞してみれば。さても嬉しやと喜ぶ氣になり。宿のことも打忘られて。口を浮ふものは南無あみた佛。誠か荀子勸學篇に。蓬生三麻中不扶而直と記し。慈鎮和尚の歌に。人の來て導く野邊に出ぬれば。麻の中なる蓬なりけり。と詠しられた如く。本より白き絲なれば。染汁次第て黒ふも亦り又赤ふもなる。我身はもとより淺間布白凡夫なれども。御座に引立られて見れば自ら法義に染る心になるほどに。随分参れよ涯分つとめよ。總して善事をつとむるは。その當座より跡て顯嬉しふなるものちや。世間て灸をせるもの。居たけれども熱を思へん案しられ。その前方の想病は員々なれど。思切て居て仕回の跡ては甚うれしふなる如く。今此御座に居る時の喜ひよりは我屋に歸て何角の用事も仕回ひ。晩お寢間入て枕を友とする時。つくくと一日のことを思續くる。朝から晩まで造こと皆徒事と氣が付て今日一日我内に居ても左耳のこともあるまひ。全く地獄の業を重ぬるはかりちやに。同行

の情も由て御教化の御座に出たればこそ。貴ひ御慈悲も思知られて有難けれ。これこそ一生の徳分ちやと。いよく嬉しふあるものちや程に。進み進んで参り下向。往にも還るにも唯南無あみた佛。く。

第二席

短夜や目に硝子の朝曙と化。三千或人の發句に口號んた如く。春の夜の夢計なる手枕に朝疾起る身こそつらけれ。もいや此頃の夜の短かさ朝の眠たさ。眠たい目を磨々手水つかう時までも。今日は法談の参らうと云ふ氣は。露のかりもなかつたちやあらうかのう同行中。それか今この道場詣て。崇ひ如來の御姿を拜み上り。大切な御法を聴聞せらるゝと。全く我働さとは存せらるゝな。偏に彌陀大悲の御手回から超ることちや。茲を善導和尚は。此遣彼喚と喚ひさせられ。祖師聖人は信は願より生すれいと仰せられて。兎角惡事には先登を急き。よきことには尻込とる徒者なれども。宿善の催しに押立られ。他方の御意あ手を引かれて。太鼓の響鐘の聲までも。極樂より参れよとある御知らせと心付。仕掛に仕事を打止め。後を慕ふ孫や子供の目を忍ひても参詣せる容成たは。中々當分の出來

心てはないと。廣劫已來ひさしき法の御縁より顯るゝことちや。爾れは斯程まで大切な御縁に誘はれ。結構な法義の席に加はつたから。三業を潜め六根を攝して。稱名念佛のはか他事なかるへき。動れば。これの余り早ふ參た。法談のまたちやそうなど。懷手にて佛前を野澤張歩き。天井欄間の彫物に心を移し。疊の穢れ障子の破れお善惡いゝあるひは歎める身かなんそのやうに柱壁を小楯お取て障と坐居り。退屈すれば眠る思案。又さもなきは煙艸のけむりに如來を薫へ。淨世咄しに説法の障りをなす。これか參詣の所詮か同行の嗜みか。龍舒の淨土文の第四丁に念ニ佛菩薩則ニ心想ニ身在淨土示させられ。行者用心集の下丁には。荷場に入毎に生身の佛御在と思ひて。正しく生身の御前にのこむ思ひをなそへしと記されて。總してほとけの御前は娑婆の極樂ちや。たゞ木て造たはどけ。畫お書た如來とはかり心得ては。稗人形お禮をなし大津畫を拜むも同事。生身の佛の御影向の御座布と思ふてこそ崇けれ。さう思ふて敬るは生身の如來はその人の前に現し玉ふとある。茲を光明大師の定善義一丁おは。衆生願見佛々即應念現在二目前一故名ニ近縁と釋し玉ひた。斯聽聞申して居る時は自から他まで。根から有難ふ思

はぬてなければとも。縦起清レ心一猶畫レ水。と釋文にもある如く。今此御座ては涙か溢れて有難ても。その有難ひと思ふ心を吾家まで提ては得去ぬ。堂の椽頭へ出るや出ぬに。履物の置所ても違ふは早。目に角たて。手前か木履を何者か替たやら。いやおれか雪踏を誰か盗みをつたやらと。もう順患の胸を燃す。ほんに流るゝ水に畫をかきしことく跡方もなひ淺間し。戸障子のとりも戻や初時雨。備前岡山或人の發句に口號んたるに同く。長の早にそり返た雨戸の板も。初時雨の濕りに逢て。直たの見事なれとも。濕のある間はかり。乾けはまた元のことくにすりかへる。今面々も其如く。御教化の時雨に逢た時は。雨戸のそりの甲乙とした屈根性も暫く直た容なれとも。我家る戻れば元の俱利破魔。さりとの耻きことと思は。胸に喜の濕のいつも絶せぬ容に随分々々法義の場を歩みを寄せ。秋の時雨の間をあらせぬ如く。思出しては唯南无あみた佛く。

第三席

文庫の文塵塚の塵見苦しからす。内庭ふ米俵多く臺所に炭薪の多きは。有へき所にあるゆへに目立ぬ凡夫お惡の多きは多き善のよとゆへ。阿彌陀如來の御謫のなひ程に。唯あり

の儘に頼むを本願に助さぬ行者と云ふ。茲を小康の一乗骨目とは。不論不淨不論心亂但依念佛と記され。法照禪師は。不簡三下智與高才。乃至但使回心多念佛と示させられ。さりともと渡と御法を頼むかな。芥分小船障ある身は。と古人の歌にも詠置て。斯る置所なき罪障を貯し面々我等は。他ふ旗の指れぬを外て響の揚られぬを。ほんの杖とも柱とも頼み參らとへきは阿彌陀如來計りちやから。思案分別する迄もなく。了簡工夫の入る場所ていなひ。一刻片時も急ぎ急ぎ南無あみた佛と。餘念も他念もなく唱るか御座の肝要ちや。かの紫式部か源氏物語の手習の卷二。五十六僧都の勸化を引て念佛より外のあたことなせそと書た如く。わんはくな手習子共の机に向ひ墨を摺り。草紙を扣て手本を直して跪きたは見事なれども。弟子兄弟か墨付合ひ。筆の管を噛み鞘を破てのてんこう。墨を穢し障子を破り柱壁に樂書。面にかく子と手ふかく子。人形かく子は頭かく。教ゆる人は世話をかくなり。唯手習の外のあたことせぬ。長なしき子供をあらまはしきものちや今各々手に數珠を握り。男ならの肩衣女ならは帽子など被て。此法座に列られた所。子供の机も向た意。いかにも長なしき見事なれども。干菓子炮米粟柿などの食物に口を慰

め。飽捧買て彼地此地のあいそ取遣は。子供のわるさに何の違どころかある。そこを念佛の外のあたことせそと誠められた。左は去乍ら斯いへはとて必を腹のたてられた。一念腹を立れの九呢切の間た積重ねし善根も。忽ちお焼亡ると經の中に説玉ひたれば。怖しきことこの廻り。一座眠て仕回ふよりの煎餅食てなりとも。胡麻餅至齒てなりとも。叮嚀に聽聞する程結構なことはなひ。去とも善か上にも善やうあわれかしと思ふ余りの操言ちやはと。同行衆必と惡ふは開て下さるな。語燈録の第六十七。を見れば法然上人の示に。能々身をも清め手をも洗ひ數珠をも取り。袈裟をも掛へし。不淨の身もて持佛堂を入へからと。此世の主なんとなにも敬恐るゝことにてあるふ。勝して無上世尊は諸の大菩薩にも敬まはれ玉へるに。われらか身も争てなのめもあり參らとへさと仰られ。また七箇條起請に。貪瞋癡發らは尙惡趣る落つへき。迷の起りごと心得て是を止むへきなり。語燈録と著し玉ひ。念佛の罪に障られねとも罪たに起れ。信薄くなるなりと。乘願房の詞にも殘し置かれて。總して法義を喜ぶ同行の。佛前ての行儀も我家にての進退ひも惡ふ遠かり善に近くやうにするこそ本意なれ。親殺主殺火付盜賊賊の尼を切り。宿鳥の首を下る大罪人も。

同心懺悔して頼めり助かると聞て。極樂を娑婆の辻場のやうに覺る。十惡五逆の徒者も。錠れの請込で捨させ玉はぬと合點して。阿彌陀如來を風來宿の亭主のことく思ひ。念佛杖につゝめて地獄のはつたり。生なからの鬼。ありのまゝの羅殺なるへし。あゝ勿體なや。今まで知らてなしたる罪科こそ悔んても跡へ返らね。一回如來をたのんてからは早正定聚の位を許され。彌勒菩薩の組合に入れて下されましたことなれり。急度慎みたてまつらんと心て心に誓を立て。指手引手に氣をつけて。三寶を御敬ひ申さねは。眞實の信心者とはどうもいはれぬ。つゝと浮世の中を例見る。乗物の外は振袖の幽見ゆると。佛前の花の新しきと。とこて見ても腹の立ぬもの。店頭針口の響と草の菴の鉦鼓の聲と。いつ聞ても大事なひもの。座布の隅から奕牋の出ると佛檀の上か塵塚になつたとは。亭主の日頃か想像られて淺間布ものちやほほとに。返すくも法義ふ鹿略のなひやう急度相嗜み。見て敬ひ聞て喜び。立つにも居るにも。思出すに住せては唯南无あみた佛。さて今日は雨も下る風も繁きに。打揃て克參られた。應なん如來にも御満足お思召さう。

第四席

したか餘り自慢のせらるゝな何なれり。經の中に設け有る大火一充三滿三千大千世界一要當三過此聞是經法と説てあり。祖師聖人は設け大干世界あくらん火をも過行て佛の名をさく人の永く不退にかなふなりと示させられ。火の中を分ても法はさくへきを風雨雪の物の敷か。と古人の歌も詠て。設け三千世界か一幾に燃立つ焔の中を。わけ歩きても聽聞せねりならぬ彌陀大悲の本願ちやとある。是から思て見れり風雨の繁きを云立にし。路次の悪さをかこつけて。參詣を怠たる族らは。もと信心かなきゆへちや。かの善光寺の如來より。聖德太子も遣されし御歌に。待兼て恨むと告よ皆人あ南無あみた佛の聲の遅さを風雅と詠し玉ひたれば。如來の我等を戀慕せられ。極樂の東門あみ玉ひ。今頼か早信とるかど。忍辱の御衣の袖の大悲の涙ふ。乾く間もなき沖の石の。人こそ知らぬ獨り御胸を痛させられ。こぬ人を松尾の浦のゆうなきに。焼や藻盤の御身も焦るゝ計に待託玉ふ所をそれを何とも思はぬ不届とやいん徒らとやいはん。さて淺間布ことの窮り。此世一旦の男女の道にさる。女を慕て百夜通ひし男もあり。男を思ふて命否し女もある。廣劫已來御戀慕ふ彌陀如來を。なつかしとも思はて暮とは不實千萬。いかに此世の夫婦か陸

しげれはどても。死出の山ふ袂を並へ三塗の河ふ手を携ること叶はぬ。さあ死ぬると云ふ時は。夫か鬼に噬れうども婦か地獄に行かふとも構ひもせねば構はれもせぬ。斯程つれなき契りふさぬ。透度見度の念力には。物すこさ道をも厭はず。云何なる雨風雪の夜通も苦にせて通ふ習ひあるに。盡未來の未までも。御見捨なき阿彌陀如來を疎畧に思ふを勿體なき。賢レ々 易レ色と孔子か示され。「君を思ふ心を法に置ならば。」と古人か詠たも茲のことちや。今時の若者ども當分の色にはたされ。浮氣の熱お催ふして。底心からの泥に思ひせ。恐ろしき誓を立てく口説の。女の薄魂なる心から風羽と乗て末遂ぬことうかくと靡き。次第ふかれくくなるを恨みて。胸を苦しめ憤ふれども。男の方ふはもとより當座の出來心なれば。露見向もせぬむこさ。斯る水臭く取卜なき人お心を盡さふより。今死なふも知れぬ。命を抱え私しか。未來の落着を受込て下さるゝ如來を頼みたてまつるか。上々吉の分別ちや。爾れども是非なき娑婆の習ひとて。自から他まで若き折るの後先の分別なく。霄々毎の關守を破て。誰と咎られ魂を飛ばせ。露と答るて消る計りの術なき。やれ盗人よと取圍まれ。棒すくめおれもこまれりの託言。或は高間の山の白雲を外ながら見

て。思絶なんど計りを人傳ならて云度。人目の關に胸の悶苦を物や思ふと諦められ。また浮名を恨ち。往々還るさの忍ふも路狭く。松吹風の翠簾お落て計す君か面影や見んと。籬の外表にイみて。我事ならぬ物越の移りさこゆるふ。心とさめく業。又手飼の猫の首玉ふ。文縫込て通はせ。蝶の羽に歌書て君か袂にとまれと放つ心遣ひに。うつらくと日を暮し夜を明して。後世とも菩提とも思はずして光陰を送ること。千万々々残念なる仕合せもし其内に。とまくととして命終らり。八大地獄の第三番。衆合と云ふ地獄に落て。刀葉林裏の苦みを受け。人間の二百年を以て。那摩天の一日一夜として。那摩天の二千年を以て。その地獄の一日一夜として。その壽百千歳のあいた浮ふ期はないと。正法念經の中に誠め玉ひたほとに早く觀念の胸を抑る。急て分別の肝の束を引卜て。未來の大事を求められよ。若びくと末を待て居る内に。竹馬春風如二昨夢。「のらすして昔の竹の馬もかな老の坂行杖とたのまて。」小稚さ時の戯れに翫ひし竹馬も。いつの間あかり老を扶くる杖となり。利口な面て味をやると思へとも。火の車の迎ひの今の間ちや。その段に成てからはのを悲しや堪難やと。泣ても吹ても。再び跡るへ飯らぬほどに。息災な間お願へ達者な内

ふ頼め。寺参りも不行歩に成てはつとめられぬぞ。聽聞も耳か不自由に成ては出來ぬぞ。一刻片時も急きくして助け玉へや南无あみた佛く。

第五席

聖光上人の詞ふ。日來學し玉へる人々たふも。捨てこそ念佛をは申されけれ。左計り惜き暇まに念佛を申さずして學問をすること無益なり。念佛を申して暇の際ふは左もわりなんと示されしは。可惜ら月日を學文して暮すと云ふは殘多ひ學文て未來の助からぬほどに。學文する際かあらは。念佛申せよとの教ちやか。何様學文と云ふものは。已れか爲にして。智慧を磨き道に入るの手段なれ。いかに目出度きものなれども。今時の學文の第一世に大言り。他に勝れんと計りするゆへに。多く誦み博く識ることをのみ手柄と思ひて。足元の明るさを失ひ。文盲なれの人に慢られ笑はるゝか悔しく。それから學文に入ゆへに。未來成佛の便にはならぬ。熟世上の爲體を模見るゝ。親仁か律義暗方にて商ひに精を入れ。且暮勤にして金銀を仕溜め。内證あたらゝかお襟元あつけければ何に。不足はなれども。幼少より利簡に曉きはかりにして。不文字に頑固なれの人中へ出て片言たらけ。陰て異名を

つけられて。それか悔しけれと取返しもならぬ。夫故息子をは物讀手習お金を入れて。識者ども手書ともしたかるものちや。その息子目へ早く學文に長し。剩る茶道蹴鞠にたつさへり。分に過たる上人お交るゆへ。立回り口跡まで誰耻しからぬ。それから親仁か文盲を見透し。飽まで親を張貫き。底に親を輕んする心出來て。後に親か文盲の異見は。尻に聞かせて用ひす。やゝもすれば孝經を以て母の頭を打つ容な族ら幾千万人か。左ある不孝な青職な和郎達か終に己身を亡はし家を失ひ。三代目は薙を被るものちや。斯る學文の仕容て何の益かあらん。早く止て彌陀をたのめよ。疾く關きて念佛申せよ。假の浮世に住乍ら親兄弟に腹立させるか文文の徳か智慧の光りか。論語よみの論語よますと云ふ世の諺は。何と合點をして居るぞ。烏か畢に孝經を熟讀したと云ふことも聞かねど。百喟の孝行を尽そとあり。鳩かいたた禮記を看破したこともなければ。三枝の禮義を勤むとある。在世の提婆は六萬藏の法を持ち三十相を具足したれども。五逆の罪人と呼はれて阿鼻地獄お沈み。樂特尊者は。守口攝意身莫犯。如是行者得度世と云ふ二句の偈文さへ。覺る兼るはその愚人であつたれども。羅漢の果を開かせられたとある。茲を蓮如上人の御文章おは。そ

れ八万の法藏を知ると云ふとも。後世を知らざる人を愚者とす。假令一文不知の禿女禿男なりと云ふとも。後世を知るを智者とすといへりと示し玉ひて。中々小智の菩提の妨けてまことの時は智慧か力になりもせず。まさかの折にの學文か便りもならぬ。兎角未來の便りとなり後世の方らとなるもの。南無あみた佛はかりちやほほに。必至くと頼まひ必至と頼めかし青さかしさい彌陀に疎きと。の歌の如く智慧を捨て此本願に絶り愚痴お還て此如來を頼めよ。頼めひ佛も喜ひ玉ひ。絶れば神も護り玉ふ。世の中ふ子を數多持たる親の心に。世智賢くて不孝な子か可愛からうか。愚鈍にして孝行な子か可愛からうか。何程賢ふても不孝な子は親の涙の種となる筈。假令愚痴ても孝行なれば。親の骸も肥るばかりみ善ふ筈は知れてある。如來の御慈悲も其如く。なんは智慧あり學文ありても。後世を知らぬ徒者。佛意に背く不孝人は彼方の御身も瘦る計りに悲み玉ひ。青蓮の御眸より。慈悲の涙を溢させらるゝとあるほどに。我身は愚痴の凡夫なれども。頼めは助かることこの嬉しやと。早く佛けの仰せお隨ひ。行にも住るにも口へ浮へては唯南無あみた佛く。

第六席

居たる旁りに調度の多きと。硯に筆の多きと。持佛堂に佛の多きは鄙氣なるものと。吉田の兼好か書たは。克も心を付けし評判ちや。凡そ神道には。唯一宗源の教あり。儒道には一貫道統の傳あり。佛法には一實真如の悟あつて。何れの道にもその一を守るを肝要とす。まして當流の掟は一向一心とあれば。佛は二佛を並へて彌陀一佛。念は二念を掛けし一向専念ちや。誤て脇士に仕ること勿あ。直に本佛を仰くへしと仰せられて。脇心を傾けな外は魂を移すな。唯一筋に阿彌陀如來の御胸はかりを頼あして。報謝稱名隨るなよとの御催促ちや。去程に他力の本願を信しなから。難行難善ふ心を掛る族の。喩は管の破れたる煙管にて。煙草を吞むやうなもので。煙か旁に洩て吾口の慰とはならぬ如く。信心の管に難行難修の破目かゆけは。心の煙りか旁に漏れて。阿彌陀如來の御胸には届かぬ。故に經の中ふの一向専念無量壽佛と説き玉ひ。黒谷上人は若し餘行をかぬれん深心闕たる行者と云ふなりと。語灯錄二著させられて。御宗旨の御兼物と云ふは。唯此難行難修はかりちや程に同行衆。一人くの手前くは氣をつけて。若や難行難修の誤あらは。一刻片時も急て改られよ。衆生の機々の千差万別なるものゆへに。其中には未來も大事なれども。

又この世も大事なりと云ふ了簡から。動れば雑修の念慮の離れ難き靈有て。未來を彌陀にあつらぬ。此世を諸神諸佛に祈り。頭痛かゝる逆呪頼むやら。目か悪ひ逆地藏菩薩の願掛るやら。爪を切り灸居るにも吉日ゆらひ。病起て醫者たのむにも元三大師の御圖を取り。思寄らざる災難くれは。佛神三寶の非道の願ひ。置かね棚をと探と祈事。愛宕參の御百度のど。心尽の現世祈に隙を張とこと。さてく淺間しき仕合せ。左ある狼狽し和郎達へ。本願の外測に彈出され。擲取の帳逃れなれば。中々極樂の門口には影を指すことも叶はぬ。茲を懷感禪師の群疑論には。雜修之者萬不二生。專修之人千無一失と示し玉ひ。祖師聖人の御和讃には。專修の人を讚るに。千無一失と教たり。雜修の人を嫌ふには。萬不一生とのへ玉ふと。仰せられたはど長ふ牛延て。五十年か七十年の娑婆。尚慕なきの夢なり幻なり。「愛も尚昔の故と思へす何ふ此世を恨み果まし」と二條の院讚岐の哥にも詠せられた如く。この世のこの善きも悪きも過去世からの定事。唯期をへきは淨土往生と。早く邪雜の僻思ひをあらためて。一心金剛の信者となられよ。左は去年は是の如く雜行雜修を嫌ふは逆も。火防の札を落紙にせよ。伊勢の御板を小便桶へ捨てよ

云ふやうな。邪見な御教てはなひと。外に王法を以て表とし。内心は他力の信心を深く貯ゑてとあれば。年の且に門に松竹を莊るも。齒朶讓葉の常盤をあつむるも。橘柑子の霜にいたまぬを取揃ゑて。蓬萊の銚りに神仙の福壽と類かり。嶋臺の鶴龜ふ万齡千秋の壽きを祝ふも神代已來の國風。その外正月七日に。芹。蕭。五形。藜。蓼。佛座。菘。蕙。の七種粥。十五日の東土や西域義長。三月三日の雜遊師の餅。五月五日の菖蒲刀。菰の粽。の轍胃人に毒氣を讓ふ祈事。盆の灯笼十月の豕子餅。節分追儼の祭に鬼は外福は内とて煎大豆撤く迄も。兪古よりの風俗。一統の王法と心得なは。曾て未來の尋りにならねどもそれふ心をとめて福を祈り。壽きを願に大なる誤りなり。噓のこの徒然草にも見たるか他か自事を影にて誇り嘲るとき噓とるなれ。その誇る人めに。くそくらると返しを云ふも。昔々の咀禁て。實の九足八面鬼神返れと云ふことなるを。唱誤つて糞食と云ふこれらも神代よりの咀禁なれ。雜修とて嫌ふへき苦なれと。何意もなふ仕來つたれば今更改めよてはなひ。諸神諸佛も敬ふことは敬る。假にも現世のこの祈るな。現世て現世のこの祈る。咽か渴く逆井を穿り。軍仕掛て矢を作さ。盗人を見て索を糾ひ。秋ふ成ての

田植同前。もはや時節か後れて点にあはぬ。過去の因か此世で生る。未來の因ハ此世で蒔かねばならぬ。是か因果の道理ちやはとふ。假の浮世に心をとめな。幻の境界に氣を痛めな。定あき浮世の中と知りぬれば。何處も旅の心地こそぞれ。千載の歌の如く。追付け未來歸宅の用意をして。娑婆の住居を旅寐の宿の假枕同事に心得。日の暮る人を喜び夜の明るをまらかねて。日々夜々に近く浄土の故郷を慕しく思ひ。月を員る日を員るて稱名念佛の足を早め。急ぎ急て南無あみた佛く。

第七席

家の造り容は夏を宗とすへし。冬いかなる所にもすまざる。熱さ比。悪き住居の堪かたきことなりと。寂莫草に書けるの實尤の了箇。寒さの間たは日敷少く熱さの間ハ長けれの等氣は透間の風を厭ひ。火燧に煖を設け。頭巾紙被に身を温め。煖酒の酔紛にも一夜の夢は解ぬるか。炎天火雲の頃の熱さは堪難き習ひにて。矮屋炎蒸不可居。高天爽氣亦全無と。揚誠齋か詩にも賦したる如く。裏屋背屋と蒸りは云ふも更なり。さらくど奇麗やかなる殿作りにて天井を高し。北窓の簾を捲て風を待ち。泉水遣水お涼しさを求め

てもいかなく。扇團子の風は顔を涼しむる計り。斯程まで忍難き暑氣をも厭ひす。皆々參詣の所。先以て殊勝千万。さりながら經の中あり。假令身止諸苦毒中。我行精進忍終不悔と説かれて。阿彌陀如來因位の昔。法藏比丘たりし時は。我等か爲の御修行に。御身は八寒の氷を踏分け。八熱の焔を押分けて。苦も入り毒も沈んで。御苦勞あそいされしとあれり。參下向の熱さは物の數かは。八大地獄の入口ち。等活地獄の火の熱さと。人間の火の熱さと比ふれば。この世の火ハ冷かなること雪の如くちやと。正法念處經の中に説き玉ひ。まして第八無間の火の熱さは。之お勝るること一千倍ちやとあるか。左程の堪難き熱さをも。堪忍扱て下されたれりこそ。斯る極惡最下の徒者かやとくと助かるやうには成たものなれ。茲を思回らさる熱さ蒸さをかこつけて。參詣を怠たり。汗しみつくか右流左死とて。法義の御座る出まい筈はなひ程に。眞實信心の行者てさああらうとならひ。足手を倒まにしても。御恩報謝の勤事は致さいて叶ぬことちや。それを等閑お思ひ鹿岩にするの。もどか上邊はかりの信心者。外側ハかりの後生願ひて。未來と云ふことを知らぬ故。近道にいへは我身を可愛からぬ愚人と云ふものちや。此世の我身も我身

なり。未來の我身も我身なれり。この世の我身か大切なれば。未來の我身もまた大切なせねばならぬ。蟻の夏穴を掘り虫を牽くも。蜂の忙しく花に徘徊して巢に蜜を作るも。皆是れ冬の要害なり。かの焦易林か詞にも。蟻封穴戸大雨將集と云ふて置て雨か降ふとせる時に。蟻か穴に關して用心をするどある。斯る小虫さるも後の難義を思ひ。末の苦を考ゑてその營をなすに。萬物の靈たる人間も生れなから。之程に早目に見えて化み墓なき境界にのみ執着して。未來の大事をなんとも思はず暮す。蟻よりも劣り蜂よりも愚痴なる人間と云ふものちや程に。實もと思ふ人あらは今日より急度嗜み。佛を貴み法を重んじて。參詣恭敬に懈怠あられな。白樂天か詞にも。無情水任方圓器不繫舟隨去住風と云殘して。水は方圓の器も隨ひ。人の善惡の友に依ると云ふ世の諺の如く。法座を參れと芝居見に行たとい。また格別に違ふことちや。筆を取ればものか。樂器を取れば音を立てんと思ふ。盃を取れば酒を思ひ壺を取れば擲打んことを思ふ。心は必らず事も觸れて來る。假にも不善の戯れをなすへからす。乃至佛前に在て數珠を取り。經を取らば怠たる内も善業自ら修せられ。散亂の心なからも繩床に坐せは。覺るすして禪

定なるへしと。吉田の兼好の書置かれし如く。心依三万境轉するものなれり。刀を見ては切らんことを思ひ。さいを見ては雙六奕のことを思ふ如く。躍場を行けり躍る氣になり。相撲を見ればそれも移り。法義の御座に列なれば自ら有難なるもの。數珠かけて佛を拜めは。自然と口を御念佛か浮むものちや。故ふ大集月藏經の第一
 二十 在蘭若一掃根得
 定福多と説かせられて。寺參りして損は行かぬ。孔子の家語にも。丹之所藏者赤。漆之所藏者黑。是以君子必慎所與處と示されて。朱に染れば赤ふなると云ふ諺の如く。總して人間は身の置所か大事ちや。惡の我宿に居れり見るにつけ聞にしたかひ。腹立まじきことにも腹か立ち。云はて齊むことをも云度なり。親子兄弟下女下男まで惡人同志の寄合ゆへ。當るも障るも地獄の因ばかり。姑の根摺言に朝夕嫁か魂を裂き。嫁か隣言に姑婆を咒咀ひ。親司は當言云ふて眞綿て聳か首を下め。聳は虛笑ひの胸に劍を磨て舅か胸腹をねらう分野。世にある習ひなれども。その世話くしき中を思切てふみ出し聽聞の會座を歩みを寄せ。一句半偈も聞て見たれば。如來の御惠みから自然と稱名か口を顯はれ。思へり人間假の浮世。誰も未來を雪佛。消て其名を殘すのかりと。悟道の魂か入

替つて。染々と後生の大事心に掛つて来た。面々の出来分別と存せらるるな。偏に
他方の御催しちやほほと。入息も出息にも唯南無あみた佛く。

第八席

信心獲得と云ふは。第十八の願をこころうるなり。この願をこころうると云ふは。南無
あみた佛の姿をこころうるなりとあれは。南無あみた佛の六字をよく心得たを。信心獲得
の行者と云ふ。その南無あみた佛の六字の意。まづ言南無者即是歸命。亦是發
願回向之議言阿彌陀佛者即是其行也。善導和尚も釋を設け玉ひて。南無の
二字は則ち歸命と云ふこと。歸命と云ふは信決定の姿たちや。依て天親菩薩の住生論には
歸命盡十方无尋光如來と著はされ。祖師聖人の歸命無量壽如來と著はし玉ひて。最初に所歸
の佛體を擧て。先御自身も如來を頼て御見せなされた。歸命と云ふは則ち助け玉ると申す
意なりと。善知識の往々に御筆を立てられたれば。我等か諸々の雜行雜修をなけとて。自
から疑心の胸のかけこを取放て。微塵も底心に隔なく。小兒か母の乳房も取継る思ひをな
して。はれくと一心に頼みたてまつると。取も直さず南無の二字なり歸命の二字なり。

もし行者の胸に隔あつて。阿彌陀如來を他人振に思ひなは。南無にも非と歸命ともいはれ
ぬ。歸命の歸はかゑるとも訓ませ。とつくとも訓ませた文字で。旅から我宿る歸ると云ふ
時。親兄弟の待手かあると思へは。何となく心嬉ひ如く。阿彌陀如來は待手なり。我等
は待たれ手なれい。永の迷の旅路をは宸早いやに覺えて。安養淨土の故郷をなつかしく。
飛立つばかりに歸度ふならいては叶ぬ筈ちや。歸くと云ふはかの詩經に。桃之夭々
其葉素々之子于歸と書た。販くと云ふ字か今の歸命の販の字で。娘の嫁ることを
販と云ふ。意は生の父母の家を出て。向ふる嫁することを必ず知らぬ所る行くとい思ふ
な。一生我身を任せて養ふ夫の家。そこで生涯朽果る覺悟ちやからは。故郷を販る思ひ
ふなれよとの教ちやか。何様その心底に成て嫁ら。舅姑をも眞實の父母と敬ふ筈ちや
み依て。去られて戻る難義はあるまい。また嫁取る舅姑も。我息女が販て來ると思は。一
中悪くなる筈はなれども。多くは嫁る息女も他人の所る行くこころ。先の舅姑も他人
を我家へ入れると隔かましう思ふに依て。指手引手に氣か置かれ。少のことも胸あ當り。
互に心か僻て來て一季半季は奥齒噛しめ。皮切灸のこころに堪て居れども。終に去つ去

られつして。未遂ぬ浮名となるものちや。今阿彌陀如來を歸命するもその如く。さらの他
 人の肌々の心て頼んで。未遂ぬ若存若亡の疵者となる。頼もしくも阿彌陀如來は。無始
 曠劫のむかしより。法性同体の骨肉を分與る下された。眞實慈悲の水も入らぬ親公ゆへに
 彼方ふ於て隔かましきことより更々なひ。今頼むがいま信するかと。迷子を尋ぬる母のこと
 くにて。我等を不便に思召せ。誚はと鎊らと有の儘にて。身を本願お任せたてまつり。
 片時半刻も急て。西方の故郷る販る用意か。その身くの肝要ことちや。茲を善導和尚の
 般舟讚には。須下捨他郷一販本國上と勸め玉ひ。法照禪師の五會讚あり。普勸道場
 同行者一努力回心販去來。借問家郷何處在。極樂池中七寶臺と示させ
 られた。去程に娑婆の縁組は化に安塔かならぬ。子のある中さるる去るゝことのある習ひちや
 このたひ極樂る縁付の行者の。一念販命の結納さるすんたれば。必至と間違ふこともなく
 一たひ往生をどけたものは。最早去られて戻る氣遣はなひ。今の世の中の婚禮は。不賢同
 志の人間ゆへ。聲か鼻鉄やら嫁か片目やら。互にしらて仲人喚か偽八百に。枯木に餅花さ
 かせて。何間口の家何貫目の銀とさくより。熊手性からしかみ付。鷲櫻にさらいよれり。

結拘の盃より心るは八島の外に詠めて。上邊計の高砂仕舞。千秋樂に苦を重ね。万歳
 樂に命を縮む。相生の別々颯々と去るはかりなる心なから。金につなかれ家に括られて
 鼻閉の夫婦。夫の婦を惡み婦は夫をいやかりて。夏衣の單ならて中綿に針をつみ。夜夜
 蝸と添寝をることゝる。妻か死ねは生暖なを墅送りして。戻足に便よき茶屋立ち寄て
 七々の忌日も魚食ながら用ふ。さてまた妻は夫の死を待兼。はや床摺の出來るより。あの
 世の人と高括りして。後の夫の才覺。或は後家しても。手代にもつれまた和尚をたらして
 穢はしき名を世上に流すこと。目に觸耳に聞て幾人とも多き例しの世の習なれり。遠慮
 していはぬ場處てもあるまい。是等は皆後生といふことをしらぬうはかふきな面々のする
 こと。傍に居ては顔に火の燈る穿鑿。笑止とも氣の毒とも言はにあまるありさま。淺間布
 といふもなかく愚也。なんと同行衆かゝる言草をかならと惡口のみ誣はれな。外の噂と
 ばかりうかくと聞れな。一人くの手前くお引當て身の慎を第一として。神妙に法義
 の筋を守られよ。眞俗二諦不二の法門は。大乘の教一世の内に三世を見。一界の中で十界
 を立るは。一乘圓頓の極段なれり。迷ふも悟りも地獄も極樂も。氣をつけてみれば目の前

にあること前車の覆ハ後車の誠。人のふりみて我振なをせちや程に。親に孝々子を哀み。夫は妻をいとをしみ妻ハ夫をなつかしみて。仁儀五常の規矩のゆかまぬ實をまもり。の中からも難面噂の内からも。如來の御慈悲を思出し。祖師の御恩を語出。行住坐臥のへたてなく。時處諸縁のゑらひなく。聲に顯して唯稱名の一行怠らぬやうと喜び玉へ

第九席

緇素孝少男女善惡のへたてなく。打揃ふて皆能參詣せられた。思ひ内にあれば色外にあらはるゝとやかや。さのみ形ふ繕はねども。信心ある人は自らその姿に見ゆるものなり。形に信心ある相を繕ふ人も。その心決定なきは。また見醒のせられてあさくしきものなり。喩ゑ氷りを水精にとりなしたらんか如し。似紫の風情とかや。末遂かたきものなりと。蓮如上人も示し玉ひて。今日此御座の中にも。人は多くあれども眞の喜ひ人は少ひものて。動もすれの形ちはかきか參詣して。心は吾屋に居るもあり。或に名計の參詣て。吾屋に居るより猶劣りたる參詣も在ふ。今日は結構な御縁がある。いと參らぬかと同行衆か誘ゑる自身は望はなけれども。老た役目の容に思て。村處ても後生願とといはとうのかり。又世

間からもあの人ハ寺の事をも勢を出して世話をせらるゝ。餘程法義ある有難ひ同行とと評判せらるれば。邪なことも無理があるまひと。人にも思われうそれでは金銀も設けよひと。世間の利欲をとらん爲に參下向するもあり。或は宿に居て世話せふよりの一寸ても出るか賢延。それも錢出して狂言みるは。費と合点して寺を參りて。和尚に物真似させてみるか。錢安につくと。利簡に走る族らもあり。或は何寺の客僧の法談は上手ちやけなど風聞かあるから。さらば一座きりへ行かふと。米澤彦八か輕口噺か。坂東源八か軍書講談聞てゝる。堂の椽頭を野澤張上り。佛へ御禮も申すすに。懐手にて立ながら聞族らもあり。衆生の機々の千差万別なるゆへに。寺を參て居ながらも。碁を打將基に隣をいれ。いつ勤行か果たやら。いつ法談か終るやらそれさへ知らすうか。慰計に日し暮しいそぎ周章て歸るゆへ。御禮を申すことさへ忘れ。責ては戻る道終なりとも。不足を思ひ解意を悔みさてあさましい我身かなど。稱名の一聲も喜へはまたしもなれど。今日の碁はその手て負に成た。其將基は此歩の遣ひ容か悪かつた故得勝なると。そのことハかり思ふて居て。御勸化に逃れたからは。吾屋に販つても妻子に對して。今日の御催促はかやうくして有つ

九程ふ。喜へよといはう容もなく。碁や將基の勝負を我家まで持て来て。家内の者あまて
 機嫌悪ふみせて。寺參を結句願志の媒ととる。さりとはあさましや形の御門徒で参り下向
 する容なれども。心は御門徒とはいはれぬ。或は重ひ病に犯され。亦は前世の業拙く今生
 貧乏生れ来て。今日此家業を勤めねは。明日の煙りか立られぬといふ容な身の上は。心の
 内に飛立つ容あ思ても参ることかならぬ。そのやうな類ひの姿にこそ。参らすども。心に
 實あるなれ。今時分は。最御法談も初つたちやあらう。有難ひ御催促かあるちやあらうと
 知なから。其身は前世の業あさましく。貧苦にからめられて得参られぬ。かゝる業の重ひ
 者か。自力の修行にかゝりなり。本の三悪道を販るよりはかはあるまいに。忝なや有難
 や他方の御流を汲得たればこそ。参詣せられた同行も。得参らぬ私も往生のかりに違ひ
 めのなひことは。さても嬉しや彼方は他心通明かなれば。せめてこれからなりとも。御禮
 を遂ませふす。穢しき病の床の上からても心はかり小手を合せ。釜の火をたきくも。
 御慈悲の念佛申しな。形の得こそ参らすとも心の参たも同じことなり。儒道てハ孟子か
 仁儀道不離三語黙動靜」といはれ。佛道ては維摩居士か光嚴童子お向つて。直心是

道場と告られたこと。惣して形はかやうなる大切な御座にとはつて居ても。心のもち容
 てこの座の下か直に地獄の炎の上ともあらわれうす。心たふ誠ならば我閨中の床の下も。
 直に浄土の蓮臺ともならいては叶はぬ程に。かならず浮々心をもたるゝな。无常定業の風
 次第。今ても死ぬはならぬ此身なれば。法の道理を徳と聽聞申分て。免ふつて角につけて
 もたゝ口を浮ては南無阿彌陀佛。

第十席

山高故不貴以有木爲貴。人肥故不貴以有智爲貴とい。五尺の童子も能
 覺へたる實語教。惣して人間といふものは。姿形の見掛より魂一つか大事のもの。かの
 孔子三千の弟子の中にも。顔回か如きハ陋巷のあはらやに。肱を枕の起臥。一簞の食一瓢
 の飲もて一つの簞に。わつかの糧。一つの瓢に水少し。それで飢さ慰める程の。貧乏人て
 有たれども。其徳彬々たりと大きおほめられ。或は子路といふ人の敝れたる紙被ふ肌を藏
 し。垢れし衣を身に著て歩かれたれども。見人ことに敬ふたどある。是等はみな魂かよか
 つた故也。今日此御座あるをのくも。身への錦を着飾て伴に伴をつれたりとも胸の

内うちかわるければ其座そのざの下したか直すくむ地獄じごく。目めにこそ見みへね獄卒ごくそつか捶うて後うしろふ立た。今いまにも死しなない追立おひだて行ゆかんと待兼まちかねて居ゐるとあり。さて又また身みには垢あか緋ひ縷いと縫ぬいぬいぬ衣い裳しやうををかけたりとも。胸むねに信しん心しんある人ひとの座ざしたる下したか直すくむ極樂ごくらく。二十五にじふごの菩薩ぼさつか蓮臺れんたいを指さし寄よせて。今いまややと臨終りんじゆうを待まち受け下くださるることあることちや。爾しかれは人ひとの身みの上うへに浮うくも洗しむも迷まふも悟あるも誤あやまるも辯はむらるるも鬼おにになるも佛ほとけなるも胸むねの魂たまたつた一つちや。近ぢかひひ諭あてて之これを示しさる鼻紙はながしの鼻はなをかまん為ためなれども。鼻はなのかりもかむのてはなひ。角引裂すみひきさて灸まの蓋ふたもそれは。疊たたみへ落おし茶ちやの雫しづく酒さけの溢こぼれもふく。一枚まいくくの行末ゆくすえに氣きをつくれは。いろくくに遣つひ用もちあるものちやか。その内炙うちの膿うみを拭ぬひ茶酒ちやさけの溢こぼれをふくなんとそへて。不あ浄じやうななことあつかはは。再またひ懐ふに入いれ入いることかなないす反古はんこ籠かごの打うちこまれ。或あるは塵塚ちりづかのそとられ人ひとか踏ふても何なにとも思おもはぬものなり。また情文じやうぶんても書かけ早人はやか不あ浄じやうななことにつかひと。或あるは經陀羅尼きやうだらにても書かけ。いかなる貴人きじんも頂いたて敬うやま。公家堂上きやうかだうじやうのよき手跡しよせきにて詩歌しやうかても書かせらるれば。たつた一枚まいの紙かみか金子何兩かねにんりゆうといふ賣買うりかひにもなる。今いまも十分じふぶんのことくて人ひとの生なれ立たちちに。上中下じやうぢゆうげの差別さべつあり士農工商しのうこうしやうの當あたりあつて。商人あきんどは賣買うりかひの道みち。百姓ひやくしやうは田いを作つくるもの。極きよくつたは。半切はんせきの書紙しよがし

鼻紙はながしは鼻はなかむ紙かみとまはまつた容ようなものなり。爾しかれとも不あ浄じやうにつかへへ捨すられ。清淨じやうじやうななことにつかへは用もちらるる如ごとく。惡業あくごう煩惱ぼんごうの不あ浄じやうはかり。胸むねに染付そまつた身みの上うへに。三惡六趣さんあくりくしゆの反古はんこ籠かごへ投なげこまれ。地獄ぢごくの塵塚ちりづかを掃はきとてられ。阿房羅刹あほうらせつも踏ふ付つけらるるまた。一念いっぺん皈命きめいの信しんを得えたれば。万善万行まんぜんまんぎやうの經陀羅尼きやうだらに。南无阿彌陀佛なんぶあみだぶつの名號なごうを。しかと阿彌陀如來あみだにょらいの回向くわうきやうなし置下おきくだされたれば。千兩万兩せんりゆうばんりゆうの黄金くわんごんにも替かえられぬ人ひとの中ちゆうの上うへ々々人ひとをとて。梵天ぼんてん帝釋ていしやく堅牢けんらう地神ぢしん焰魔法えんまほう皇みまで。大おほきは尊そん敬けいし玉たまふとある。しかれば姿すがたは免まれ角かくも免まれ魂たま一つか大事だいじちやはとに。息災そくさいな間まに彌陀あみだを頼たのみ達者たつしやな内うちに極樂ごくらくを願ねがひ。手足てあしの叶かふ折おりふ參詣さんぎをいたし。咽のんに息いきのたへぬ間まは稱名じやうな念佛ぶつぎ怠たらと。喜よろこひつつけて往生じやうじやうをとけられよ。

第十一席

逆如上人さかじやうじやうじんの御詞ごしみ家いへに猫ねこを養やしなはされは。日中にちぢゆうふ鼠ねずみのかけめくるものなり。内に信心しんしんなき人ひとは無理むりの惡行あくぎやうををこりやせし。されは生質なまかつの惡あくききことを直ただして願ねがふへしといふにはあらねども。信心しんしんを得えたる驗しるしに日頃ひごろ惡あくからん心こころも自おのらなをさんこそしかるへきにこれも願ねが力ちからに催もよほふされしては。又また争いてか我心こころより心こころを直ただすへへやと仰おほせられて。總もして信心しんしんををた

る行者の。追付あみたといふ佛になる身分ちやからり。日頃わろき心も自ら直そ容に万事につけて。无理邪をせぬやうにと嗜れぬまでも嗜むか本意ちや。強盗切剝賊の引入。主人を腰て會釋ひ親の咽喉を下る徒ら者も。頼めは御助とはかり合點して。參詣の履物を盗み。馬行の内の散錢を心掛るやうな族らは。磔場の巾著切同前。後生も未來もしらぬ罪人極樂參りは掘ても叶はぬ。觀經の中も盜現前僧物と誡められて。假初も憎の物を盜しものは。臨終の夕へに猛火燃立車の迎を受け。八頭八々角八々眼の怖しき鬼に引立られて。地獄の底の。眞倒浮む期なひとあるからり。悲きことの極りちや程に。今までこそは知らて作りし罪科なれ悔ても跡へかへらぬ。是より後を急度慎み奉らんと。改悔慚愧の思ひをなし。斯る置所なき罪人をも御見捨なき如來の本願。いてく御たせ候へどたのみまいらせ。是程のや目に見へて化にはかなき人間界に在りなから。非道なるころをもちていつまでか生延ん。娑婆はこれ不定のさかひ極樂こそは常住の御國なれ。追付往生遂んつものど。報謝の稱名いさみあらは。罪も報もさらりと消滅願まぬ功德の主となる。そこをこそ一念即滅无量罪ともとかれたり。八万諸聖教皆是あみた佛ともありけに候ふ。

釋迦は遣りみたに導く一筋に心ろゆるすな。南无阿彌陀佛をとなうれり。佛けも我もなかりけり。なむあみた佛の聲はかりしてと。心んから底から他方の御慈悲に染込たれば。自ら口は浮ひ聲ああらはるゝものは御念佛。念佛の聲さへあれば自然と法の徳として。无理の悪行起りはせぬ。象虎猛しといへとも。鼠をとるには猫にしかすと。古人の詞にもある通り。虎狼の力らかどればと強てにも。鼠をとるには猫程賢ひものはなひ。猫さへ家に飼置たれば。白晝鼠は得誇らぬ。自力諸善の虎狼かどればと力か強ふても。吾等か胸の内には隠れし。十悪五逆の鼠をとるには。他方信心の猫はと勝れた法りはなひ。この信心の手飼の猫か南无阿彌陀佛と聲立れば。一聲稱念罪皆除とて。聲の下にて其餘煩惱の鼠の身を縮め二ひ荒はせぬほどに。有や無やの煩惱か起らは。早速南无阿彌陀佛。信心得たるしるしと云ふは報謝稱名の聲はかりたといふ信心ありといふとも名號を稱さらん證なく候ふと。祖師聖人も仰せられ。深山かくれの櫻木はなかわる人なけれども。花は春ことにひらくそかし。心の中に信あらは。人のなからぬ赤土生の小屋にひとりそむとも。念佛は稱ねらるへし。たしなみても念佛の稱ねられす。佛恩をわそるゝは信心のなきかゆへなり。と

蓮如上人も示させられて。嗜ても稱へられど。慎ても忘れ易ひは胸に信かなきゆへちや。夏の暑き時分には一人居ても暑ひことかなといふ。別に寒ひと云ふたればとて寒さか止てもなし。暑といへども。あゝ寒ひことかなといふ。別に寒ひと云ふたればとて寒さか止てもなし。暑といへばとて暑さか涼ふなるてもなければども。心ろに思ふゆへに口ちへ出る。今もその如く御慈悲嬉しやと思ふ心か實ならん。獨り手ふ稱名は口業のあらわれいての叶はぬ。爾れは在座の人々の中に。若や不信の方あらは。急ぎくして了解を極め。近づく浄土の果報を喜ひ。唯中の何からも南無とて佛く。

第十二席

朝夕に見れんことあれ住吉の岸の向の淡路嶋山。淡路島は住吉の真向に見へて。いかにも面白き景色なれども。朝夕詠めて居る住吉の者の何とも思はぬ。總して珍しきを好む人情の習ひゆへ。わか白味噌より隣の楊林を味よく覺ゆ。人の惜かる花は是非に賞ひ度ふなり。任せ米はそのまゝ食飽とるの誰か腹中も似たり寄たり。朝夕聽聞する吾師匠御坊の法談には虚耳つふし。珍らしき客僧の勸化かあるといへり。勇み進て参たからるは。何國の同

て行衆も同じこと。その客僧の法談も五座か三座の。一心に耳を澄して聞るれど。十日廿日も重なれば何の間にもやら退屈して。一座の内も眠り半分。痒切して居直るやら。噫氣交りの念佛やら。隣りの人の挨拶やら。煙草香やら。鼻かひやら。何やら角やらあ心か散。つゝあつとして下向をすること。さりといへく勿体なや残多やな。是といふも余り佛法か繁昌すきて。あの御坊のしやるほどの法話は。此方も知て居るといふ心ろから。聽聞も鹿抹になり。あの御坊の法談もまた前角な者ちやと思ふ氣から。をのつから坊主をも輕しむる容あなる。茲を祖師聖人の見通しの御目から。正像末和讃の中にも佛法あなつるしるしには。比丘比丘尼を奴婢として。法師僧徒のたふとさも。僕従ものゝ名としたりと御述懐あられ「末の世の墨の衣は武士の奴の袖となりもこそすれ」と古人の歌にも詠をかれて。總して今時の同行衆は。佛と法とは敬へども。僧寶を敬ふすへをしらぬ。手次の坊主を輕しむるを法義者の美目の容に覺へ。親の忌日に佛壇の掃除をさせ。祖師の報恩講に内佛の磨物を頼むのまたしもちやか。動もそれの明窓の張替へ破障子の綴して下され。明日は珍容かあるから勝手の取持頼みまこと。心易まゝに坊主分の人をとらまえて。日雇も同前あ會

釋ふ族らか多ひ。そこをこそ御開山は法師僧徒のたふとさも僕従もの名としたりと御歎
 きなされた。寔に賢愚經の中には。正使畜妻挾子四人己上名字僧衆應下當
 敬視如舍利弗目蓮等と誡められ。大集經の九卷目や同五十二卷目には。設ひ獵師
 なりとも。身に袈裟を掛たらは敬へよとある佛勅。祖師聖人の御贊文にも。無戒名字の比
 丘なれど。未代濁世にいたりては。舍利弗目蓮にひとしくて。供養恭敬をよめしむと示
 し玉ひて。兎角末世に至りては。妻をもち子を愛する无戒名字の坊主をも。舍利弗目蓮尊
 者の如く。敬ひ貴み奉れよと定めをかれしことなれとも。左右ならぬか迷ひの凡夫。これ
 を教る坊主分も次第に悪ふなつて来て。斯申す拙僧初名聞と利養とはかりお拘て。茶屋揚
 屋の亭主同前のころふなり。門徒の法義の悪ひ所を見付ても。馳走且那に得いはと。
 金くれを門徒の云ふことは。無理なことも尤すくめあして。御齋の塵をとりたかる濁り果
 たる泥坊。この泥坊の法談なれば。麁抹に聴聞あらるゝもまんさら無理てもあるまひか。
 さりなから羅什三藏の語にも。譬如臭泥中生蓮花唯採蓮花勿取臭泥玉ひてかの羅什三藏の漢。己來唐。已上譯經の名徳。二百九十二人の中の其一人 譯經圖記
 に

第十三席

て天竺龜茲國に出生し玉ひ。七才にして出家し。日々千偈を誦し三藏十二部に達し。上天
 文を明らめ下も地理に達し。内外の兩典諸子百家さらお知さる處なく。前後兩秦の間に於
 て。翻譯し玉ふ所の經律論。凡そ八百余卷 編年終お八百人の沙門三千人の學徒を扶助して
 並ひなき知識なりしかとも。白純王の女を妻とし。十人の妓女に戯れ玉ひたゆへに。説法
 なさるゝ時譬へは臭き泥の中に蓮の花を生ずる如く。此羅什か身は泥よりも穢れたれども
 説所の法門は蓮花よりも淨らかな程に。蓮花を取て泥お目をかけるなよと仰せられたとあ
 る。今喩へて喩へらるゝことではなけれども。末代今時の愚僧ことさか説法も。そのこゝ
 ろて聴聞あられ。外に藁苞ても内に金か包てあらは。藁はとてゝも金をとてる道理はなひ
 愚僧は藁のことくても。説所の法か大事の金ねちやからは。謹て聞ねはならぬ筈のこと。
 それお御座る着時から眠る合点て。壁や柱らを小楯にとり。射交りに御座をふさぎ。たま
 く目か覺れば吾宿の錢金の算用を此座てするやうな心ては。如來聖人お背をむけて居る
 も同前。それか參詣の所全ていなひ。いさ何れも眠りを覺して南无あみた佛。

狗を養ふは盜賊をまもらしめんため。雞を飼ふことの曉をしらんかためなり。もし盜賊を
 見ても吠さる狗。曉になれども鳴さらん雞の。その養ふ益なきものなり。淨土眞宗の行
 者といふは。信心を決定せし。たゞ其名ばかり掛りて。信心なからん人は益なしと見へ
 たりと。信證院殿の御詞ふ殘し玉ひたり。淨土眞宗の家に生なから。信心を決定申さぬ人
 の。盜を見て吠る狗。曉になりても時を告げぬ雞のやうなもの。何の益もないとどの
 御責ちやか。何と同行衆皆打揃ふて賑かに參詣はせられたか。とれくも残りなく見事信
 心を決定申して居るか。方に一つも未了解の方あら。はやく信心決定申されよ。さて
 信決定の上からは。兎角大悲弘誓の恩徳を思ひ。法義の御座へこころを掛。晝夜朝暮の別
 ちなく。南無阿彌陀佛くと稱名を懈怠ぬやうに相嗜まれよ。若この一大事を大様に心得
 て。うかく月日を暮と人あらはそれは。狗よりも劣り。雞よりも尙淺間敷身の上といふ
 ものなり。既に雞は毎朝一曉にさへなれば羽扣きして。八々六十四聲歌ふて時をちか
 す。しかも歌ふ所の六十四聲は緣度經の偈文で。今日已暮明日又來。今生已過
 來世又近。身如芭蕉。隨風易破。命如朝露。向日易消といふことを。八遍

つく繰返して歌ふとある。しかれの雞りは緣度經の无常の偈文をなかくと。八々六十四
 句つゝ毎朝一曉に時を違へて唱るに。万物の變たる人間に生れなから。手間日問いらぬ
 南无あみた佛。一息ふさへ稱へたらぬ名号。時を定めることもなく。處をゑらふこともな
 く。一聲なりとも十聲なりとも。思ひ出次第口ちへ浮ひ次第に。たい唱えよとあることな
 るに。この最易ひ營みことを。鹿畧にするは勿体なひ。随分嗜み節角慎み。懈怠のなきや
 うに相續あつて。せはくしき吾屋の内にあるときも。賑々しき此御座に居る時も。參る
 折にも下向の道にも。如來の御慈悲を思ひつけ。夜る狗のはゆるを聞ても。曉の雞の聲
 に目覺しむも。吾大様を改めて狗さへ盜賊に聞耳たて。雞さへ時を失すそれく己か所
 作を守るも。吾身はあさましや淨土眞宗に生れなから。所作の念佛をこたへり。廣大無邊の
 御恩徳を。長忘れしたことの勿体なやと諫めをつけて。南无阿彌陀佛くと喜々。指手引
 手に氣をつけて。惡を遠さけ善に近付。滅太に惡行起さぬ容み。非道の煩惱作らぬやう
 心て心を説諫せられよ。尤迷の凡夫ちやからは。邪見なこころも起る筈。无理な欲心も
 萌と筈なれども。それを其儘に積重るは。佛の御難義たいく御慈悲立販り。あゝさて

かゝる淺間布我等こときの徒ら者を。本と御目掛下されし。他方の御恩を貴やと早念佛の
 聲立てよ。法義々といへんとて寺へ参た時ばかり。數珠を握た折はかりと思ふて居るは大
 きな僻事。新安の朱子か大學の序にも。不待求日用彝倫外と書たに同く。日々夜々の身の
 營み舛て米を計るにも秤て金を掛るふも付て回るか法義の道ちや。そこを躰如上人は。商
 をするには利分をまもるためなり。されんとて手を濡して粟を握り。倒れた所ふ土を埋む
 はどの。无理の賣買は天道もをころし。信を得たれん輩のさのみなくとも。世を渡るほど
 の利徳はあるへしと仰せられた。商はかりのことてはなひ諸事万端に心をそへて。非義邪
 まをせぬやうに嗜み守るか人間の信。動もそれの心得の悪き同行衆は。法義のくこれの
 これと分鬪の心から。参詣恭敬は見事なれども。宿へ眠ると早溢面眉お皺よせ。目お角立
 聲隙られて滅太に惡意地。朝夕の食物も善惡いふて膳突出して。内義を呵り食糞を賣て
 腹を立る容な族らは。鼻垂して飯食ふと足摺したる童の境界。親目か悪ふそたて。小き時
 分より。小言ぬかしたか癖になりて成人しても止ぬゆへちや。心ある目から下墨の笑にも
 及はぬこと。行義も作法も小笠原も。上下たる時はかり後生菩提も信心も。寺街場へ参て

からと思ふ愚癡な了簡から。何てもなひことに腹を立ちよとしたことふも罪作るさりと
 はあさましく。韓詩外傳といふ書を見れり。甲饒曰君不見夫雞乎頭戴冠文也
 足搏距武也。敵在前敢闘勇也。見食相呼仁也。守夜不失時信也。雞雖
 有_二五德_一君猶烹而食之何也と書て。彼雞の身の上へ文武二道の徳もあり。勇
 氣もあれは仁儀もあり。信の一字も守るとあるに。人間の皮を被りながら。仁儀五常の信
 をしらす。放いまくに夜日を明との佛神三寶へ對しても。耻さことのきはまりちやほどに
 よくく萬に心をくはり善にい進み惡ふは懲りて。たい何の中からもなむあみた佛く。

第十五席

謀計雖爲_二眼前之利潤_一終當_二佛神之爵_一。正直雖非_二一旦之依怙_一必蒙_二日月之哀_一。とい聖徳太子の御詞。凡て人間は心の正直なるを貴ふ。神は正直の頭に宿ると世
 の諺にいふ通りて。何程参詣恭敬をせられても。心底に深く邪欲をかまえて。眞實信の喜
 ひにならぬ人は。また光明の外側に居る身のうへ。極樂淨土の帳透れなればなかく。以て
 往生成佛の素懷は遂かたひ。眞ふ信心を得た人ならひ自ら魂柔軟。一旦非道な根性か起

りても。よつてあまのしやといふ機か付て。自然と嗜む心にならいては叶はぬ筈なり。それ
 に幾な世を渡るとて種々さまざまの巧みをなし。もかり根性山こかし人を救し世をあやつ
 り。我身一つを立んとするの。天道地祇の冥見もをころし。昔し呂望といひし人は魚を釣
 りて身過とせしに。曲らぬ針に餌をもさくす海の中へ投入れ。吾食物となるへき魚はか
 るへしとて引上しにその語のことく。世を渡るほどは魚を得られたとある。これ正直の徳
 ちやとや。清貧常樂。濁富常憂。と光明皇后の内裏の屏風に書付けて。平生詠め玉ひ
 しことく。身の食くしても心か清めは苦みなし。身は榮花に暮れども。心の内に腕りあら
 はいつとも安堵はならぬ筈。依て孔子の家語にも。不義而富於我。如浮雲とあつ
 て。不義邪まで設けし金の浮へる雲も同じこと。縦ひ英耀ふ飽満て心の儘に暮れども。誰
 か百年の形體を持んや。手に掬ふ水に宿れる月かけのあるかなさかの世にも栖むかな」と
 紀の貫之も詠た通り。化ふはかなき人の命。本の滴や未の露有か无かの境界に。非道を構
 るて何かせん。鱧魚も一期蜺子も一期。貧苦も一旦富貴も一旦。明日死ぬやら今日死ぬや
 ら。定業任せの露の身をかいいたして地獄へ落るな。縦ひ此世の歡樂は。玉の臺ふ起居

して。錦の衣裳を身に纏ひ。八珍五菓の好味食心任せにするとも。今にも無常の嵐に逢
 ふて。さあ死ぬると云ふ時に地獄の迎の火の車十王廳へ引出され。俱生神の薄の文淨玻璃
 の鏡の影。罪も報も隠されぬ糧量舎の業の秤。争ふことなき大罪人と。船王の傾りの眼
 阿房羅刹も縛られて。憂耻さらすその時は泣ても哭ても跡も取らぬ。林下の貧道の風月に
 嘯きて。法味を嘗め心を道門に染め。身に解脱を斯して世を幻の如く思ひ。身をのこと
 く觀せし何のいふせきことかあらんと。無住禪師も書れた如く。よしや此世は貧くして。
 芦の丸屋に膝を容れ蒹菼にて雨露を防ぎ。山の木の葉に煙りをたて。畔の落穂を飢をたど
 かり。或は澤邊の根芹を摘野邊の蕨を糧に折り。乱湯お口ちを慰むる貧乏人て在ふとま
 上。胸の信を了解あらは臨終今端の時になり。此世彼世の際に。垣生の小屋の窓の下葉
 交の上てもあれ。阿彌陀如来や二十五菩薩光明照して現はれたまひ。蓮の臺を指寄てその
 まゝ乗せてしつくと。天ふ花雨り地に音樂。金の幡蓋玉の瓔珞。幡をたて下さるやら
 天蓋さしかけ玉ふやら。右も左も佛けの御迎。前も後も菩薩の御供て。賑々布往生をどけ
 奉るふ。さら〜疑ひのなひの信決定の身の上ちや。

第十五席

如_レ蟻_ノ行_ニ磨_上。左_ニ旋_蟻。右_ニ行_磨疾_蟻。遲_{不_レ得_レ不_レ左}。と晉の天文史の中に記せしは。日月東行の分野を喩へたる詞なるか。此喩の意ハ石磨の上るにあかりし蟻カ右の方へ行ふとそれとも。磨を左へ旋したれば。蟻は遅く磨は疾きゆへに右へ行くと思へども磨につれられて。左へくと旋ることく。今准て思へは。今日在座の面々も一度他力本願の石磨に御助け候へと打乗た行者は。たゞ明ても暮ても欲ひ惜ひ惡ひ腹立やと。地獄の方へ地獄の方へと旋れども。本願他力の磨の旋りは疾き故に。他方にそられて極樂へくと旋り行ことなり。茲かそなはら他力の御不思議。蚊にもあふにも羽はあれども遙か空へハ飛こと叶はぬ。大鵬といふ大鳥は九万里にして一度ひ羽をのす。この大鵬の翼の下はあふ蚊の類も取付たれば數千万里の虚空を飛行すをのく我等か身の上は蚊よりあふより劣りたる。羽翼をもかれし蠅同前の埒の明ぬ境界なれども。本願他力の大鳥に助け玉へと取付たれぬ。生死の大海たつた一飛ぶ。やすくととる淨土参りちや。茲を蓮如上人の教要抄の中には幼き兒は手をひかれて立。老たる人は杖にそかり行く。これ力のすくなきゆへ

なり。一切衆生自ら菩薩の道あすむへき力なし。されは本願の他方に依て。煩惱の山をこへ生死の岐たを過行きて。涅槃の京に入るへきなりと仰せられて。とても自力の働きの叶はぬ我等か氣質ちやからの。渡りあ行合たる舟にの。まつ授付て乗るより外の手なしと敬佛房もいひれた如く。早く他力の舟に取付。一葉万里の舟の道唯た一帆の風次第身も心もみれた任せと覺悟して。少も行者の才覺を加へと。死して行先の何處と白波の。弘誓の舟の行くに任せて。一心一向專修專念に南無阿彌陀佛くと稱れぬ。智慧の眼の盲れし者も。修行の行歩の叶はぬ人も。罪障の重き荷物も。佛智不思議の舟の徳。皆積のせて御渡ある。十方衆生の御約束。智者も愚者も善人も。惡人も男子も女人も老たも若きも。選ひはせぬを隔はせぬ。楊枝に蒔繪し。餅の皮むく英耀者も。薬薬て髪つくね。露の葉て鼻かむ思末男も。漏れを残らす彌陀の本願。茲をこそ法然上人は。語灯録の二の五丁に。重き石輕き麻から一つ舟に入れて。向ふの岸に届くるかことしどの玉ひたはとに。これく同行衆必そ根機か拙ひとて。卑下とることはいらぬとよ。又たハ障か重ひとて。貧著するハ大きな僻事「船しあれば千曳の石も泛ふてう誓の海に波たつなゆめ。」と兼好法師も詠

れた通り。一度信を了解したれば。そこかすなはち弘誓の御舟に乗た所とあるからり。縦
ひ煩惱の風吹起り。妄念妄執の波は立つとも危いことは少しもなひ。あみた如來を船頭と
し。觀音勢至は水主梶取「あみた佛と唱ふる聲を梶にして苦しき海を漕離るらん 金葉集俊
設我得佛の梶をたて。十方衆生の櫓柏子揃へ。至心信樂の槓を掻き。欲生我國の梶。乃
至十念の帆をあげて。若不生者の追手の風を眞艦にうけ。婆娑の塚を出汐の波間を漕行。
西方の大港極樂淨土へやとくと。渡り著くにさらく疑のなきり。信了解の身の上をか
し。

第十七席

善導大師の御言往生禮讚六葉に。行住坐臥必須勵心刻己晝夜莫廢畢命爲期上
在一形似如少苦前念命終後念即生彼國文行住坐臥とあるからは。行にも
住るにも坐すにか臥すにも。必ず勵心たい喜へよと仰る。勵ましてといへんとて。自力の
勵みを以て稱名に力味を入れよと云ふことではなひ。進み兼たる馬お鞭を添へる意。懈怠
からなる心の駒に。相續の鞭をあて、稱名念佛。勇喜へよとあることを勵心と仰る。剋

己とあるは己れとは。己れくか吾儘な心。剋してとはをしかつと云ふこと。金剋木の剋
土剋水水剋火 剋の字と同じ事て。金は木おしかつものちやあ依て金剋木といふ。今己
れくか吾儘な心に。おしかつと云ふ氣味合。己れくか吾儘な心をいひ。起て居るより
寐て居るかよし。働くより働かぬかよし。錢の入るより入らぬかよし。本寺師匠の入用。
奉加も出すよりは出さぬかよひと思ふ。淺間布心を提て居るか皆人の習ちや。その淺間布
吾儘な心に摺達おしかつて。法義を御相續申せよとのことちや。さて畢命爲期とい。畢
命のいのちおはると云ふこと。期のかきりと訓む文字なれば。法義の勤めことは五年十年
か期りてもなく。五十六十か期りてはなひ。命の畢るか期りちや。則ち一形と云ふか一生
涯のことなれば。命短きものは十聲一聲乃至一日七日ても。命長くは七十年八十年乃至百
年ても。一生涯の間晝夜ともに應やらと。稱喜のねはならぬか彌陀如來の廣大の御恩徳ち
や。只御恩報謝といへは心易ひ容なれども。一生涯稱へねはならぬ。畢命を期りにせよと
仰る。世間のことは若ひ時に骨折て。老て樂をすると云ふか定り。後生のことは夫と違て
年の寄る程。彌大切にせねならぬ。何て有ふと息の切れるまでか限りちや。茲を法然上

人の語灯録二十三葉にも下もは。十聲一聲までも彌陀の願力なれば。必と往生とへしと信して
 幾等はどこを願なれと定めず。一念までも定んで往生と思ひて。退轉なく命終るまで
 申すへき也。文と仰せられた。是云ふ時は少し苦の容な者なれども。眞實の信心を得た人な
 らは。よもや喜のすは居られぬ筈ちや。根から後生ことお取合はと。世を吾儘に暮と和
 郎の目からの。後生を願ふ人は折々如來を御禮を遂げ。口にも稱名を申と。朝夕の御勤御
 給仕。ちつと苦の容も見ゆれども。法義を喜ぶ身に取ては苦なことは少もなひ。喻へは
 長者富に飽かると云ふ諺の通り。失皮苦な。金持の設けことに世話とる容なもので。金銀
 の人の欲かるものちやに依て。昨日も設け今日も設け。朝も晩も設ても飽と云ふことかな
 ひ。金を持たぬ人の目からの。借もくあれ程金を持って居て。最早入らざる世話てなひ
 か。あの容お世渡の世話計やかすとも。少と遊山遊興もしたり。月見花見てもして面白
 樂んたり。御坊寺も参られぬかと思へとも。その金設けする人の心の鬼と二人りして働
 くゆへ。左のみ苦ひとも思はず。能滑稽の見物より月見花見の遊事より。金を設る程な面
 白ことはなひと合點して居るに依て。その世話をやくのか直に樂みになる。總して物は心

に好ぬの樂にのならぬ。茶の湯を好く人の廣ひ座敷を持乍ら。暑ひ時分にも狭ひ敷奇屋圍
 の内て。湯をたきらせ茶をたて。互に喫。是を傍から見ると。暑ひ時分に窮屈な術な
 ひことと有ふと。好ぬ氣からは思へとも。好く人の心からのその窮屈な取も直さと樂
 みちや。法義の道もその如く。胸に信心ある人はいつも喜ひの絶間なく。死ねば地獄と究
 つた私か。佛の御恩て極樂参りすると思へ。心の嬉さ限りなく。その嬉さか餘て身の勤
 となる故に。参り下向も苦ふならと。昨日も参り今日も参り。朝も晩も喜んでも御縁お飽
 と云ふことはなひ。法義を知らぬ人の目からの暑氣の時分冬天に照され。或は夜の短ひに
 睡たひ目をして参り下向。明日の仕事の邪魔になる。さてく入らぬことやと思へとも。
 信を得て御慈悲を喜ぶ身の上。其熱ひことを忍たり。睡たひ目を凌ひたりするの。取
 りも直さず月見花見よりは猶樂にならひてはかなかはぬ假令ひまた夫程に行届かそ樂には
 ならずとも。未來を大事と思は。徒らな心も少しの慎めよ。藥の苦けれども病か愈ると思
 へは否なからのみ。炎は身お火を付ることなれ。誰好く者はなければ。後の藥ちやと
 思へはこそ忍に。熱さも忍ゆれ。懶ひくと思ひ乍らも。法義を深く喜へ。追付死し

ての樂となる。そこを經には雖一世勤苦須臾之頃後生无量壽佛國と説かせられ。此世の煩
さは暫しの間なれども。それか淨土で永ひ久ひ樂の因になる程にと仰る。いかさま聖道門
の人の三大阿僧祇を經て。修行して悟らるゝより見れぬ。纔五十年か三十年いか程か勤め
たれぬとて。事かましまし苦行といひぬ。増て人間の定命は五十三四歳。それを打越て
六十七とも存命する身の。五十年を取て除て残りは利過る命なれば其内て五年や三年は
禮拜恭敬參下向に付けても。少々苦もせよかし。頓て淨土を參りたれぬ。少しの苦を受け
て見度と思てもならぬとあるからは。此世かほんの苦の受仕回ちや程に。今にて无常の
風さへ來たらぬ。娑婆の迷の暇乞をして。日出度淨土に參ふことのあら嬉しや南无阿彌陀
佛。

第十七席

次てに死場のことを得と聞て置しやれ。口傳鈔の下卷有難ひ御釋かある。其御言に淨土
往生の信心成就したらんに付けても。此度か輪回生死の果なれば。歎きも悲みも尤も深か
るへきお付ひて。跡枕に並居て悲歎嗚咽し。左り右ふ群集して戀慕涕泣ととも更おそれ

依るへからず。左无からんこそ凡夫氣もなくて。殆他力往生の機には不相應なるかやとも
嫌のつへけれ文此覺如上人の御釋の意は。自も他も信心を得たれば。最早此度か輪回生死
の暇乞。娑婆の名殘の果なれぬ。臨終今端の時に。親兄弟も涙溢して泣きなり。妻や子
共に心も殘る筈のことちや。それか未來の障になるとは思ふな。眞の信心さへ得たれば。
信心に手を引かれて淨土に參る。かの明言録に信を得た者の淨土に參るに違ひのなひこと
の。生れたる者の必ず死ぬると同じことちやとあるからは。誰有て死度ふて死ぬる者のな
けれども。不ても應ても定業さへ來れぬ死なねはならぬ。假令ひ淨土を參とむなひと云ふ
ても。實の信さへあれば是非とも往生せねはならぬ。是か正定不退の利益と云ふものしや
爾れの死場の善惡を穿鑿するふは及ぬ。唯信心か有か無かを穿鑿せぬならぬ。信心さ
へ得たれば臨終ふは構ぬ。去に依て蓮如上人の勸章ふ。當年の夏此頃の何とやらん殊の
外。睡眠に侵されてねむたく候ふいかんと案事候へぬ。不審もなく往生の死期も近くか
と覺へ候。寔に以て無懶名殘惜くこと候へ文と仰せられた。是は此われくか心底の有容
を打出しての御催促らや。何の彼方か无懶名殘惜と思召ふ筈のなけれども。樂てもなひこ

とを樂ちやと思ふて。娑婆を執着するか凡夫の習ひちやに依て。齒に絹着せすふその凡夫
 の實をつき出して。無懶名殘惜と仰しやつたものちや。また法然上人の淨土を願ふ行人は
 病患を得て偏に是を樂むところ仰せられたり。爾れども病患を得て喜ぶ心更に以て起ら
 ず。淺間布身なり耻へし悲むへきものか文ども仰せられて。病患を得て偏に是を喜ぶとあ
 る法然上人の御言の。もと因縁經二卷ありと云ふ經の中にある釋尊の金言て。善人樂死ハムコトナリ
 囚出獄シテ。惡人恐死オソシ。如囚入獄シテ。文と説かせられた佛説。是の善人と惡人との死臨の
 違目。善人の死ぬることを幸から出る容お思て喜ぶ。惡人は幸に這入る容に思て悲むと仰
 しやる虚の御座らぬ。我等の病患を得て喜ぶことは儲置て。側お付添ふ看病人か此度の病
 氣は合點か行ませぬと云と機嫌か惡ひ。追付け本復て御座らふといへは何となく心嬉。是
 れか惡人て無ふてなんとせう。蓮如上人は惡人てもなければ。死ふかと思へは無懶名殘惜
 と御意なされた。彼方は其程に有ふ道理はなければ。今日の我等惡人に肩身をすはめさ
 せまい爲なり。依て歎異鈔の中ふも名殘惜ナマレシ思へども。娑婆の縁尽て力無ふして終る時に
 彼土には參る也と御示しなされたからは。忝や有難や臨終今端の際に取詰。跡や枕に寄添

ふて涙組。孫や子共の目を見合せて恩愛の心か起り。跡に名殘の惜まれても。無常の使は
 戻すことも叶はねは。是非なく命は終るども。命さへ終れば其儘極樂淨土ソノマされども平生業
 の一念て未來の三惡の底に沈む。動れの同行の中お最早此苦の娑婆しや。早ふ茲を仕
 回ふて淨土を參り度ふことさうまると云ふ者かあるものちや。そりや虚の口僻と云ふものし
 や。重ひ病を受けてさへ飛立つ程お死度ふいなひ。此容な死とひなかるものを彌陀に追詰て
 下さる。世には臨終正念にして。傍る寄居る親兄弟妻子眷屬友同行おまて。それくの
 暇乞をして我の追付命終り淨土を參ります。各々は跡よりこされ。必ず如來の御恩を忘れ
 ず。御念佛を申さつしやれ。我の淨土を待て居まると云ふて。出息も南無阿彌陀佛入息も
 南無阿彌陀佛と靜かに喜び。念佛の聲諸共にすつと。息引取る容な正往生を遂る人かある
 ものしや。是等は石の中の玉の如く大切至極なことで。能々過去の目度人てなければ左右
 は行かぬ。必と左右な臨終正念の人を羨しかつて。あの容な死場てこそ往生を成ふけれ。
 此世の果場か惡ふては往生いかと危み。臨終正念など祈るは大な誤り。人の臨終の正
 きを羨むの尤なれども。それで往生の一大事を疑ひ。兎や角やと思ひ感ふは。皆自方の僻

事しや。何と我働てする往生ならん。妻や子に心か亂れて命を惜む容なものは。參られま
いか知らねとも。此度の往生は彌陀の大願業力に引立られて往くからは。死場のことハ案
事なるな。善きも悪きも過去世からの定りこと。假令野の末。山の奥。千尋の海や虎臥嶋。
いつくいかなる濱の洲崎。水に溺れ繩に縊れ。刀に當り吹雪ふ倒れ。病に臥し頓狂中風の
卒倒急死。或は産前産後て命ハ終ふとも報土の往生疑ひなし。

說教集錄

〔言々海後編
勸化文選〕

終

明治二十七年十月十五日印刷
同 年同月廿五日發行

編輯者

併發行

兼印刷者

京都市下京區五條通富小路東エ入
本覺寺前町三十七番戶

西村 十次郎

京都市下京區下珠數屋町東洞院西エ入
橘町八番戶（護法館）

大賣捌所 西村九郎右衛門

發賣所

京都 同 同 同 同 同 同 同
盛名 古屋 同 同 同 同 同
天盛 名古 同 同 同 同 同
黑澤 同 同 同 同 同 同
花津 卷 同 同 同 同 同

興澤 田友書五郎院
顯道 田正書次郎院
山內 長左衛門郎
永田 長左衛門郎
西村 佐七兵衛
藤井 佐七兵衛
三浦 兼兵衛
池野 兼兵衛
舟山 彦兵衛
郡司 彦萬兵衛
梅津 喜八

東京 同 大 熊 大 同 東
阪本 大 熊 大 同 東

哲學 藤清書九郎院
伊藤 善九郎院
松本 善九郎院
長崎 次郎院
岡崎 次郎院
樋口 善九郎院
積善 館支衛
大岡 善九郎院
近田 善九郎院
學海 三郎院
倉石 忠三郎院
守川 吉兵衛

●阿彌陀經十六羅漢法話 全一冊

定價金三十錢 郵税金四錢
此書は説教有名なる明樂寺顯賢院か懸河の辨を以て阿彌陀經序分の列衆十六羅漢一々に就て因縁を擧げ本宗安心に府合し之を見る者解し易く之を聞者感し易く實に説教の龜鑑と謂へき良書なり茲を以て師か遺係藤谷學師の校閱を乞ひ譬喩因縁等の典據を確め之を世に公にせり冀望は布教傳道を任どる諸君熱讀あらんことを乞

香雲院澄玄講師述 藤谷惠燈學師校正

●正信偈法話 全部六冊 正價金壹圓

右ハ宇内ニ名聲ヲ博サレタル香雲院澄玄講師ノ著ニシテ正信偈ノ一句一偈ニ就イテ詳細ニシテ繁ナラズ簡ニシテ餘サズ三十一會ニ分テ能ク其祖意ノアルトコロヲ説示セラレタル古今未曾有ノ説教ノ良材ナリ乞フ當局者ハ座右ニ備ヘキハ勿論凡テ振假名ヲ附シタルハ何人ヲ論セス一本ヲ求メテ正信偈ノ妙味ヲ知レ

釋了信師述

●通 正信念佛偈鼓吹 定價金卅錢 郵税金四錢

從來此偈に就て註釋書數多ありと雖も或は高尚に或ハ簡短に未だその宜しきを得ず實

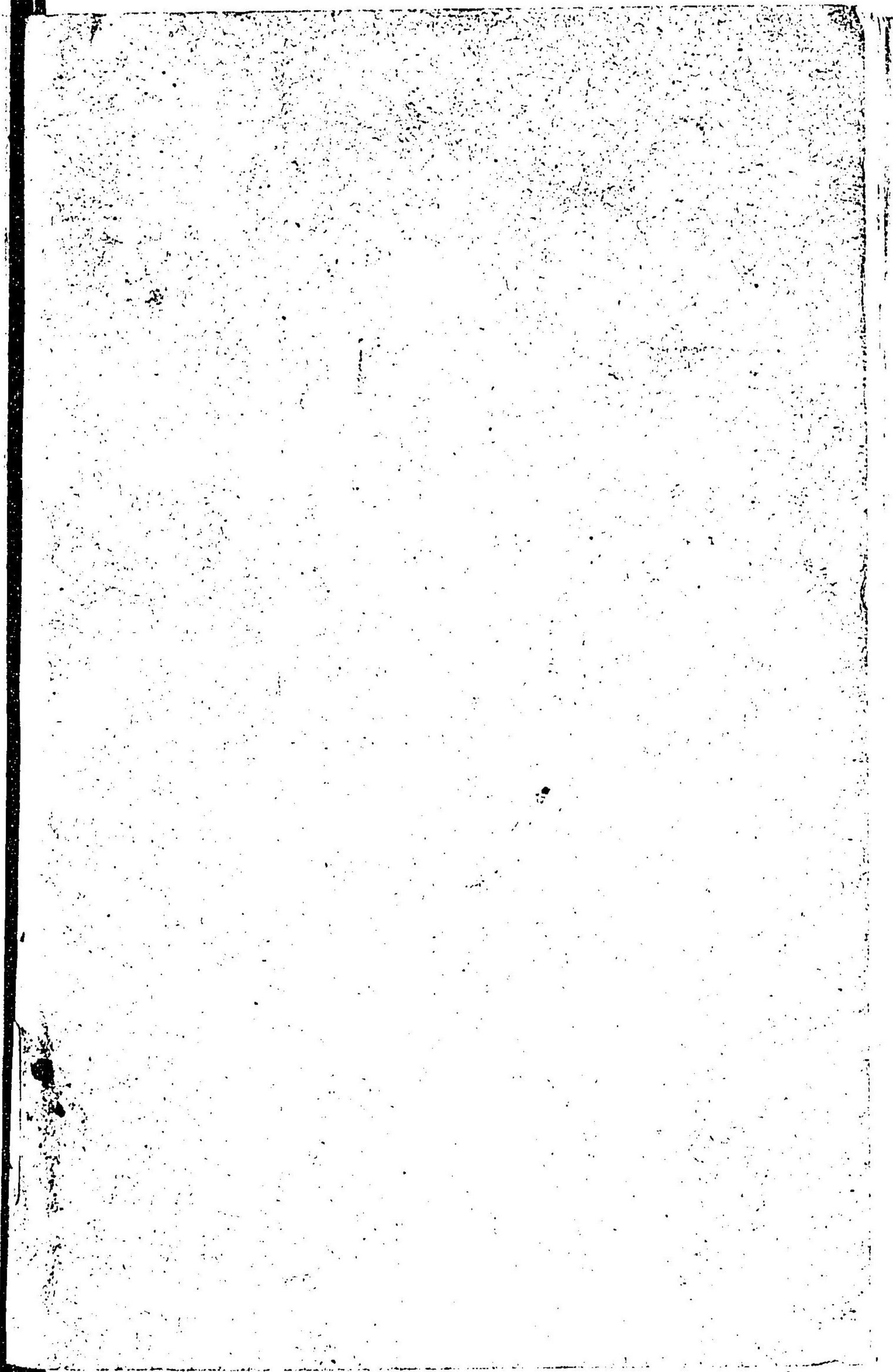
に遺憾なりしか然るに本書の釋了信師か得意の雄辨を以て反復可啞に譬喩因縁を交へ一言一句を剩さず委しく辨述せられたる良書なれば僧侶方には説教法話の好材料となり信徒方には朝夕拜讀の内ふも倍法味愛樂せられんことを希望す

●校正三帖和讚略解 全三冊 實價參拾五錢 郵税金六錢

此三帖和讚は我宗に流を汲むものは朝夕拜讀せらるゝも其義理深奥にして容易に深意を伺ふことを得ず單に拜讀に止まる者多きは實に遺憾なりし然るに本書の一首一句お就き懇切に深意を和述せられ今般更お校正を加へ晨も傍訓を附け出版せし者なれば早く此書に依り朝夕拜讀の中にも法味愛樂あらん事を希望す

●五帖 御文講話 全五冊 紙數七百頁 洋紙假綴

此御文は我宗の流を汲む者は朝夕拜讀せらるゝも其意味深奥にして容易に深意を伺ふこと難し然るに此書ハ一句一言を殘さず懇に誰入ふも解し易く講話せられし者にて尤も傍訓を附け婦女子に至る迄御文の難有き事を知らしめん爲め出版せし者なれば僧侶諸彦ハ更なり信徒諸氏には是非一讀せらるべき良書なり



015887-000-6

特18-98

説教集録

妙達(智洞) / 著

M27.10

ABC-1672

